

TAD

TOHOKU AKINDO DESIGN
2018 AUTUMN & WINTER
とうほく あきんど でざいん 2018 秋冬

Vol.
5

TAD Vol.5

とうほく あきんど でざいん 2018 秋冬

TOHOKU AKINDO DESIGN 2018 AUTUMN & WINTER



とうほく あきんど でざいん 2018 秋冬

TAKE FREE
¥0

生きるための
知恵とセンス



TAD Vol.5

資源

生きるための知恵とセンス

02 都市のキワ(edge)を探す

06 仙台市民×座談会×考える私
みんなの消費と私の感覚

10 地元愛は知に宿る!?
超難解「宮城マスター検定」の謎
郷愁刑事イタリーさとうの捜査記録

16 まちと わたしと かわ

24 東北を活かす
資源としての伝統

33 潜考アジテーション

34 = アンケート =
あなたの〈資源〉を
教えてください。

54 = 協働クリエイターによる往復メール =
〈資源〉をめぐる言葉

連載

36 ききみみずきん スイス編
その二、カン・ミアの生活

40 純愛アタック!!
第2回 長井勝一漫画美術館編

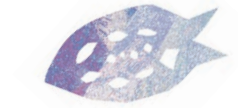
44 雑草からパクチー
第五回 民の芸、僕の芸

48 コンノケンジのお買い物
第5回 ゴミ箱

49 DIY PROJECT
プロジェクト完了記念 施設お披露目会開催!

50 ROSEBUD TAROT READING
秋冬の運勢

52 協働クリエイター略歴



目の前のものが
自分自身の出来事に
ならない
を
乗り越えるために。

編集長 鈴木瑠理子

とうほく あきんど でざいん 2018 秋冬

「仙台の人って、自分たちの地元のことを蔑むっていうか、『つまらない』とか『何もない』って言うよね」と、生まれ育ちが仙台の友人と話したことがある。誰かから魅力を聞かれると、人口とまちの規模のバランスがよくて不便がないといった感じのことを口にするものの、これといった何かを思い浮かべるのに時間がかかってしまう。もちろん地元にも好きなものや場所はあるし、好きな人たちもいる。惰性的に暮らしているつもりもない。けれども同時に大きな期待を持つわけでもなく、流れていく時間とその中で起こる変化を、他人の出来事であるかのように見ている。こういう感覚に、思い当たる人もいるのではないだろうか。

たとえば「つまらない」に対し、なにかを「おもしろい」と感じるとき、それは対象となるものがずっととんと腑に落ち、自分自身の出来事の一端になりえたときだと、言うことができるかもしれない。

それは今、あなたやわたしが生きているということを一瞬間にひらめかせ、目の前の風景を生々しく際立たせる息吹のようなものでもある。

だとしたら、「つまらない」と言えてしまうのは、生きること根深く結びつく渴望の表れであるようにも思う。そして、その渴望に向き合おうとするのが億劫で、どうにかなっていくだろうとまちへの関心がしぼんでいくような状況がもし仙台の暮らしのなかにあるのだとしたら、人々の意思やありようによってつくられていくはずの地域は、この後どうなっていくのか。

そんなことを思いながら、まずは自分自身の立ち位置を知るところからはじめたいと考えた。主題として挙げたのは〈資源〉である。ここでいう〈資源〉は、「目の前のものが自分自身の出来事となるためのきっかけ」と独自に捉えたい。

そして今号では、それらをわたしたちの暮らしのなかに探った。〈資源〉は生きるうえで欠かせない知恵やセンスとして、人々が持つ違和感や日々生まれる思いの根に現れる。そう信じ、協働クリエイターの面々や協力いただいた方々のまなざしを、記事を通して提示してもらうことで一冊をかたちづかった。これからお読みいただく皆さまの暮らしのなかにも、ふとしたときに〈資源〉が立ち現れることを願って。

都市のキワ

(e d g e)

を探す

貞包英之

山形などの小規模な都市、または東京という大都市にしか住んだことのない私からすると、仙台のような「中都市」は、住みやすい、夢の場所のように映る。大抵のモノは街から出ずに揃い、また会いたい人や情報はやってきてくれる場所。にもかかわらず空間に余裕があり、ラッシュは殺人的ではなく、近隣に自然も豊かな場所。

そのためか、私がおこなった調査でも、仙台都市圏に住む者の満足度は高かった。仙台都市圏と宮城県の他の市部、郡部を分け、生活に対する評価を聞いたところ、仙台都市圏在住者では「総合的に見て、今の生活に満足している」「政治や社会に満足している」「転職したくない」「総合的に見て、現在住んでいる地域の現状に満足している」などの項目で肯定的な回答が統計的に有意にみられたのである（科研費研究『地方都市のモビリティ』）。

この満足度の高さを土台としてか、人口の増減でみても、仙台はかなり恵まれている。日本全体では人口減少が危惧されている。それは他人事ではないにしろ、2010年から2015年にかけて（震災の影響はあるとはいえ）仙台市は、3・5%、全国505市中9位という人口増加を記録している（国勢調査）。

仙台だけではない。「札幌広福」とまとめられる札幌、福岡、広島を含む他の中都市も同じく恵まれたポジションにあり、そのためか、近年、中都市に注目が集まっている。

たとえば増田寛^{*}からは『地方消滅 東京一極集中が招く人口急減』（中公新書、2014年）で少子高齢化に警鐘を鳴らしたが、その対策として、中都市の「ダム」的機能に期待を寄せている。すべての地域は救えない。だからこそ、地方の中核都市に人口を集め、人口減少を食い止めようというのである。

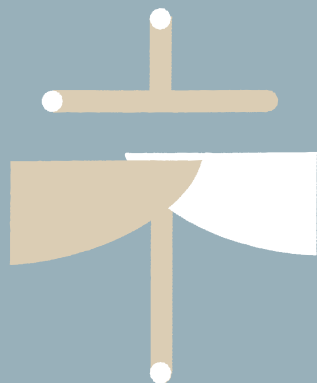
こうした方策に、筆者は少なくとも一理あると考える。過疎的な地域を見捨てろというのではない。むしろ逆に、人口の減った地方では、生活を豊かにするために、中核都市がより大きな役割をはたすと推測されるためである。

実際、先と同じ私の調査によれば、東北地方に住む人は、仕事や買い物、教育の機会を得るために仙台に頻繁に出かけている。仙台はハブとして、地方の生活に欠かせない場所になっており、この意味では仙台を「豊か」にすることで、他の地域の生活も同時により良くすることができるとは思われる。

以上のように、仙台はいわば勝ち組として、現在、富や情報、人口が集まる場所になっている。ただし一方では、この「豊かさ」が本当に良いものなのかは、一度は立ち止まって考える必要がある。

仙台のような中都市は、そもそもこれまで東京や関西の大企業の支店を中心とした「支店経済」によって支えられてきた。だが近年の交通の整備や情報環境の改善によって、「支店経済」の役割は相対的に低くなっている。

それを補っているのが、近年の「消費都市」への変貌である。仙台でも駅前の





再開発がさかんだが、それを一例に近年の中都市では、快適で巨大な商業施設を駅前や郊外に配置し、または巨大な劇場やスポーツ施設をつくることがブームになっている。それによって消費を促進し、また雇用を確保することで、地方の中心地としての地位を維持しているのである。

それはもちろん悪いことではない。中都市の商業施設の巨大化が、近隣都市の駅前商店街や百貨店を衰退させていると批判もされる。だがそれはそのまま中都市が地方の衰退を食い止める「ダム」的機能をはたしているという評価にも、裏返すことができる。

とはいえ、それにとどまらない問題も残る。都市の再開発や大規模な施設の建造は、仙台のミニ「東京」化を進めている。高くなった賃料に耐えられない個人商店が退出し、全国的なチェーンの店舗がその穴を埋める。結果として街は、「東京」を少しだけ後ろから追いかける、どこにでもある場所になりかねない。

それはそれで良いのかもしれない。ミニ「東京」化は、多くの場合、見たくないものをカットし、再編集した「東京」の矮小化にとどまる。しかしだからこそ、それなりに住みやすく、快適な街をつくりだすことで住人に歓迎されもする。

だが長期的にみれば、それがうまい舵取りであるかは疑わしい。ひとつにミニ「東京」化は、グローバルな都市競争のなかで仙台の重要度を低下させてしまうためである。東京にあるものを小さく真似た都市に、わざわざ訪れようとする者はどれほどいるだろうか。

さらに問題となるのが、ドラスティックな変化から仙台を遠ざける危険性である。

小都市を訪れると近年の人口減少のなかで、中心街がしばしば姿を変えていることに気づく。ネガティブに言えば、中心街はかつての活力を失い、空き店舗や空き家が増え、商業街としての意味を失っている。

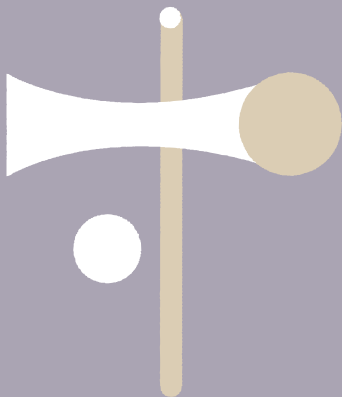
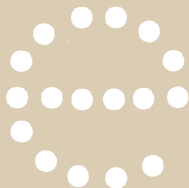
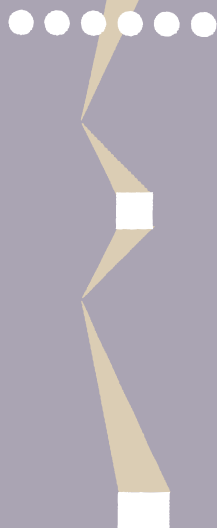
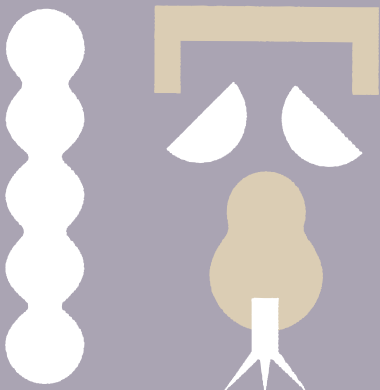
しかし悪いことばかりではない。たとえば近隣の山形市などではチェーン店が撤退した代わりに、商店街のはずれやキワ(edge)に、小規模な自営業のショップやカフェ・レストランが生まれている。

都市はそうして時代の変化に適合しようとしているのではないか。かつてのように多くの人が訪れる、マスのための商店街に戻ることはおそらくない。だが安くなった地価に助けられ、大都市や郊外のモールでは生きられない一風変わった店が、住宅と共存し生まれつつある。小規模で気ままに営業されるという意味では不便だが、ポジティブに言えば商売と生活を融合させる実験がおこなわれているのであり、その意味で少子高齢化と人口減少に適合する暮らしの先端(edge)が、そこにほんやりと姿を現しているともいえる。

逆説的にも恵まれた環境のなかで、中都市が取り残されているのがこうした変化なのではないか。一定の経済的活況に支えられ、マスの消費を前提とした20世紀型の都市に中都市はとどまり続けている。

だがこうした中都市の活況は、長期的にみれば、あらたなものや、そこにしかないものに出会う街の魅力を削り取っている危険性が強い。結果として、あらたな時代に適合するための変化の可能性も奪われてしまう。

もちろん、悲観する必要はない。あらたな暮らしは、わたしたちの気づかないささやかな隙間でしばしば生まれる。ではこの街仙台に、新しいモノを産みだすキワ(edge)はぶいに、そしてどのようなかたちで姿を現しているのだろうか。



貞包英之(さだかね・ひでゆき)

1973年生まれ。立教大学社会学部准教授。専攻は社会学・消費社会論・歴史社会学。著書に「地方都市を考える『消費社会』の先端から」(花伝社、2015年)、共著に「自殺の歴史社会学『意志』のゆくえ」(青弓社、2016年)など。

みんなの消費と私の感覚



Profile

モモ

社会人0年生。宮城県出身。ホームセンターやカフェ、展示会などでアルバイトをする中、いろいろな消費者、消費行動があるなぁと感じている。

もう少しで大学を卒業する社会人0年生・モモです。

成人式の記念撮影で、スタッフから「お母さんからの手紙」を渡された時、頼んでいないサービスに感動を強要されている感覚、記念日をビジネスにしていることへの「違和感」を覚え、世の中の消費やサービスについて疑問を抱いているところです。社会に出る前に、世の中の消費行動について他人の感覚を知りたいと思い、年齢や職業もバラバラの4名に座談会を開いていただきました。

生活していく上で大切にしている感覚、行動のものさしを「資源」と捉え、それが表れるもののひとつ「消費」の面から、「資源」を考えてみたいと思います。ここでは、座談会のお話に私の感覚をコメントにして重ねています。

みなさんも、みなさんの感覚で、座談会の内容を一緒に考えてみてください。

スタート!!

座談会メンバー



年齢	40代
性別	女性
職業	フリーランス
結婚	未婚

北海道出身。震災を機に東京から仙台へ移住し7年目。戸建賃貸住まい。



年齢	30代
性別	男性
職業	団体職員
結婚	既婚

宮城県出身。未就学児の子どもを含む4人家族。持ち家住まい。妻は専業主婦。



年齢	30代
性別	女性
職業	美術作家
結婚	既婚

岐阜県出身。子ども2人を育てながら絵描きとしても活躍。夫婦共働き。



年齢	20代
性別	男性
職業	大学生
結婚	未婚

宮城県出身。実家から大学に通学。アルバイトは定期的に。法学部在籍。

最近の

「1万円以上の買い物」

親の立場では、小学6年になる息子の塾代ですね。初期費用として5万円ほど。クリエイターとしては、絵を入れる額縁ですね。数万円するものも、値段を気にせず、作品と擦り合わせて「これだ」というものを買っています。

私は月2万円の小遣い制で、自分で使うお金は昼食代くらい。家のお金でだと、最近スーツを買いました。アウトレットで3万円くらいの既成品。仕事で毎日着るスー

ツは消耗品なんですよ。趣味への費用は？

趣味は？もともと車に興味で、家族が乗る車の選定は任されていますが、結婚してからカスタマイズ禁止令が出ているので、でももう慣れたというか、家族を持って、趣味にお金をかけなくていいや、という感覚を自然と持つようになりました。

自分は大学生で実家暮らしなので、あまり1万円を超える買い物はないですね。どうしても欲しい財布や靴があったら、バイトして貯めて買います。ちなみに自由に使

えるお金は、バイト代を含めて毎月4〜8万円です。

私は最近、仕事をかねて韓国に行ってきたので、交通費、宿泊費だけでもかなり出費しました。海外は年数回、国内旅行は頻繁に行きま

すが、展覧会やイベント視察など、ほとんどのことが仕事に関係しているので、飲食以外全部「必要経費」という感覚です。

最近の記憶に残る買い物、サービス

絵を描く仕事で、首や肩がすごく疲れるんですよ。先

日整体に行こうと思ってブログで調べたら、九州で有名な整体師が仙台に来るという記事を見つけて、行ってみ

た。約4時間かけて全身施術してもらって、3万円。これは安いなと思いました。

費用対効果、ということですよ。私は数ヶ月前、登山好きな知人に誘われて、勧められるまま登山グッズを5万円分買ったんですけど、未だに使ってなくて。なん

少し前まで母と同じ眉毛カッターを使っていたんですけど、いいものを買ってみようという話になって、ネットで5000円くらいのものを注文したんです。でも切れ味がイマイチで。納得できませんでしたね。

そういうことがありますよね。うちの子がよく、お祭りの風船とかおもちゃを欲しい欲しいというので、買うんですけど、すぐに飽きられて。もったいないなと思います。

子どもにとっては、お祭りの会場で、出店のものを食べるというのも貴重な経験か

値段を気にしない買い物...! したことあるかな〜 (100均くらいかな、笑)

結婚って、家族って、そこまで感覚、変えるんだ!!?

「欲しいもの」はどこで見つけてるんだろう? 私は雑誌で見つけて、お店に見に行くのが多い。

自由なお金、学生の方が多い!! (夫婦共働きか、どちらか一方か) とかにもよるのかな〜

3万円...! 額だけ見ると高い?!?! でも、それで仕事に集中できるなら、元は取れるのか、交通費を考えればむしろ安い??

まず買えるのかすごい。本当になんでも買ったんだ? 「まずは秒から」ってやつ?

このくらい出せば大丈夫! って、値段で安心してたのかな。それなら実物を見て決めたいけど、試せるものでもないかな。

私は買わないかな。でも小さいころは欲しかった! ウケは買ってもらえなかった...

体験を買うのか〜！
風船も、
「すぐ遊ばなくなるんだよね〜」
ってことも含めた体験料
なのかも!?

「専門家におまかせ」
って安心——!!

「家の仕事」が商品になって
いってるな〜

時給換算、わかるー!

登山グッズの時は、
そこまで「シブサビ」に
考えなかったってこと?

確かに!
街中の服屋さんとか、
どこを見ても同じ店みたいで、
つまらないんだよね〜

外と比べてみて、
見えてくること!

「ちょっといい」の範囲を
出ないように生活するから
何かいい生まれるってことも、
起こりづらいのかな〜。

考えるとキリがないな...
考えすぎると、
何も買えなくなりそう。

なと思うので、私はたまに買いますね。「出店のものは高い、でもここでしか食べられない」ということを勉強してもらって、その体験料だと思っ

て払っています。

なるほど、体験料。

最近感動したのは、車のメンテナンス。私は車に詳しくないので、ディーラーのメンテパックを契約しているんです。最近またメンテに出した時、コーヒーを飲みながらゆったり待つ間、「すごく豊かだな」と思ったんです。多少のお金は払いますが、何

の心配もなく、プロに任せて、自分は落ち着いて待つていられるというのが。わかります。私は車好きですが、仕事もあつてなかなか自分でメンテできないので、ディーラーのメンテパックに入っています。子どもを遊ばせるキッズコーナーもあるんですよ。

いろいろなサービスを見て、私は時給換算しちゃいます。がんばれば自分でできるものでも、労力や技術力を勘案して、「そんなに安くやってくれるんだ」と思うと、任

せることが多いですね。例えば料理なら、自分で作りたい人もいれば、お金を出してプロの料理を食べたい人もいます。どこに価値観を置くかでしょね。

仙台での
買い物・消費の印象

絵の売り手からすると、買い手の反応が都市ごとに異なることを感じます。仙台の人は、周りの様子を伺っているというか、保守的かなと思います。私が岐阜出身で、地元だと消費が派手、オープン

だということもあると思いますが。仙台の人は冒険しない、無難な消費活動だなという印象です。

私は宮城からほぼ出たことがないので、違和感を感じたことはないですね。

仙台は、よく言えば無難に、穏やかに暮らせる都市であり、悪く言えば特徴がない都市だなと感じています。観光にしても、母がよく「お客さんを連れていく場所がない」と言っていて。でも、僕小さい頃海外で暮らしていたことがあって、向こうでは衛生面

などが心配で外では遊べなかったもので、仙台に来てから何も気にせず遊べるのが嬉しかったですね。

仙台って、住みやすいまちベスト5に入ると聞いたことがあったんですよ。観光スポットも特徴的なお店も少ないけど、ビジネスの中継地だからこそ、価値観が均質的なのもかもしれませんね。

どんなことを考えながら消費している?

作り手や産地のことまで考えるという世界的な流れが

いろんな立場があるよね〜

私は服が好きだけど、値段も重視してる...
(セーターを得意...)
アウトレイト品の中から、
かわいいのを発掘して
楽しんでる。

選択の幅、
あんまり実感はないかな〜。
ネットだと、直接買いに行けない
ものも手に入れられて便利!
でも私は、できるだけ
実物を見て買いたい派。

これも体験料!

「何か大切か」
で、「買いたいもの」が
変わる!

(買えるもの)

感覚、人それぞれだなあ。

私にとっては嬉しくなかった手紙のサービスも、嬉しいと感じる人はいるのかもしれないと思いました。商品・サービスの価値や、価格の妥当性、それを買うことによる影響は、消費者自身が一人ひとり考えて、自分の答えを出すしかないのでしょうか。

社会人1年生になったら、私は毎日の生活の中で、何を大切にしたい物をするんだろう。今はまだ見えませんが、選択のチャンスの度に、自分を客観視しながら考えてみたいと思っています。

買い物には、きっとその時の私の価値観が表れているはずだから。

いい買い物がしたいなあ!

座談会を聞いて
思ったこと+感じたこと

タレコミをもとに捜査に踏み込むイタリー。
まずは情報収集だ!



「宮城マスター検定とは?」

宮城県が開催するご当地検定で、県内外の「宮城のファン拡大」と、復興へ進む「これからの宮城」を広く発信していくことを目的におこなっている。県内経済団体及び有識者で構成される宮城マスター検定推進会議が軸となり、各分野からのサポートを受けて運営している。3級は2007年から、2級・1級は、2008年から始まり、2011年の東日本大震災の影響で3年間の休止を挟んだのち、2014年から再開し現在に至る。問題の内容は、宮城県にまつわるあらゆるジャンルから出題される。全50問中40問以上正解すれば合格となるが、問題は極めて難しく、毎年の合格者平均は全体の2〜3%である。2017年については合格者0人と、誰も宮城マスター検定の壁を突破するものはいなかった。

合格者の割合でみれば
難関国家試験として
知られる司法書士試験と
同じくらいだ!

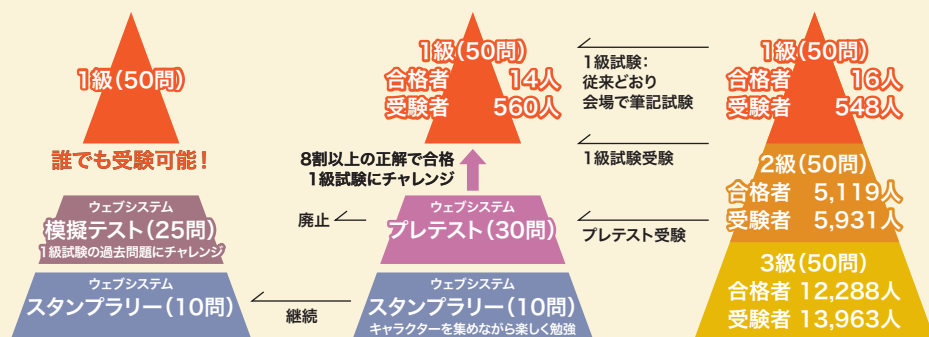


現在(2017年7月～)

再開(2014年7月～)

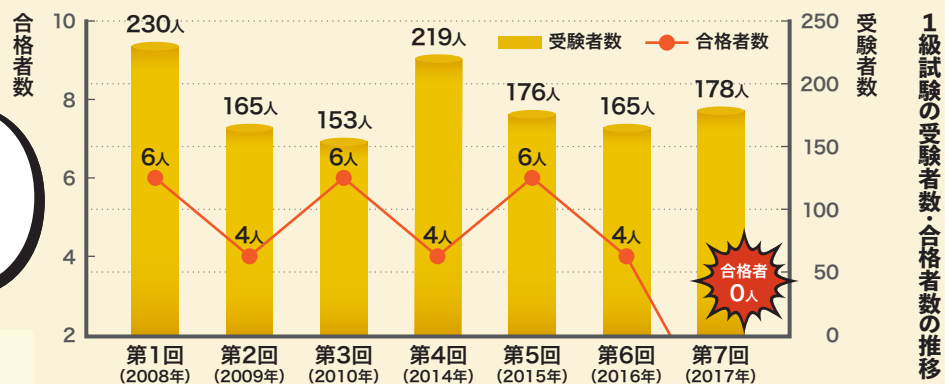
これまで(2007～2010年)

宮城マスター検定の歩み



気軽にウェブで
試せて、マスターを
目指すなら筆記試験
というわけか。

よし、関係者へ
の聞き込み
向かうぞ!



地元愛は知に宿る!?

超難解「宮城マスター検定」の謎

「郷愁刑事イタリーさとう」の捜査記録

「生まれ故郷である宮城県を愛し、地元のことなんでも知りたい。そんな熱い思いを抱えながら日々地域の人から寄せられる情報の捜査にあたる郷愁刑事イタリー。ある日、彼のもとに1件のタレコミが入り……。」

宮城に生まれ育ったのに、
地元のご当地検定が全然
解けません!
あれはなんなんですか!?

なに!?
地元の人でも解けない
ご当地検定が
あるだとい!

地元愛は知に宿る!? 超難解「宮城マスター検定」の謎
～郷愁刑事イタリーさとうの捜査記録～

過去問③ 仙台市内にある「虎屋横丁」の名称は、
かつて「虎屋」というお店が、店頭で木彫りの
虎の置物を飾ったことが由来とされていますが、
この「虎屋」は何のお店だったのでしょうか。

1. 薬屋
2. 魚屋
3. 八百屋
4. 呉服屋

過去問①

次の施設のうち、蔵王町に
ある施設はどれでしょうか。

1. 宮城蔵王キツネ村
2. 南蔵王青少年旅行村
3. みやぎ蔵王セントメリースキー場
4. 蔵王ハートランド

※2017年の1級試験から
問題の一部を抜粋。
難易度を感じてみよう。
(答えはp.13の左下に掲載)

イタリーは関係者への聞き込みを開始した。
すると、重要な情報を握る人物が現れた!



宮城マスター検定の実態を探る!

関係者



宮城県経済商工観光部
富県宮城推進室商工企画班
主事 中澤 真哉 さん

宮城マスター検定事務局の中澤さんに、
検定の成り立ちや難易度について伺った。

— 宮城マスター検定はなぜ
おこなわれているんですか？
どんな目的が？

村井嘉浩県知事が就任した
際に「富県宮城※1」というス
ローガンを打ち立てました。そ
の実現のためには観光や産業
面の強化だけでなく、県民が
宮城県をよく知ることが重要
なのではないかと考え、ご当地
検定として宮城マスター検定
を始めました。

— 難易度が高く、合格者は
極めて少ないとのことですが、
元々宮城マスター検定が始
まった年から2010年まで
の4年間は1〜3級までのラ
ンクアップ方式で試験をおこ
なっていました。東日本大震災
以後、中止していた試験を再
開した2014年からは、筆
記試験として1級試験のみを
宮城県庁を会場に開催してい
ます。また、ウェブでは誰もが

参加できる過去問題を引用し
たテストを用意しています。開
始した当初から1級試験の難
易度は高かったのですが、その
難易度を改めて下げることが
していません。合格した人た
ちは、ものすごく宮城県のこ
とを知っている方たちです。県と
しても、1級試験の難易度を
保ちながら宮城マスター検定
に合格してほしいという思い
があります。

— 試験問題は誰がつくって
いるんですか？

我々事務局や1級合格者の
方に協力をいただいて素案を
つくり、その後宮城マスター検
定推進会議（以下、推進会議）
に諮^{はか}って作成しています。推進
会議は「脳トレ※2」でおなじ
みの東北大学・川島隆太教授
を会長として、宮城に関わる

様々な人たちで構成されてい
ます。宮城県の公式ウェブサイ
トに掲載している過去問題を
見ていただくと、観光や歴史、
産業や復興など、出題される
ジャンルや頻出するポイント
があるのでわかると思います。
ですので、こちらもぜひ受験に役
立てていただきたいと思います。

— 宮城マスターに会ったこ
とは？
もちろんありますよ。

— あるんですか?!

ええ。推進会議の中でも、1
級保持者が有志で結成してい
る「いっきゅう会」の方たち
にもオプザーバーとしてご意見
をいただいているんです。

過去問②

仙台市の観光名所となっている
瑞鳳殿境内には、「感仙殿」と「善応殿」
があります。このうち「善応殿」は
誰の御霊屋でしょうか。

1. 伊達輝宗
2. 伊達忠宗
3. 伊達綱宗
4. 伊達吉村

過去問④

「日本の蔵王ヒルクライム・エコ」は、
蔵王エコライン、蔵王ハイライン
を舞台とする自転車ロードレース
ですが、スタート地点とゴール地点
の標高差は何メートルでしょうか。

1. 1,175m
2. 1,334m
3. 1,500m
4. 1,716m

— 宮城マスターはどんな人
たちなんですか？
合格者全体でみると30名ほ
どいらっしゃいますが、皆さん
様々です。多くは地域づくりに

関わっていると聞いています。
多賀城や北山五山※3でボラ
ンティアガイドをされている
方、商工会議所の観光に関わっ
ている方や、宮城県、仙台市の
職員もいらっしゃいますよ。

※1 「富県宮城」：富を生み出す豊か
な県土を創り、富の循環によっ
て活力ある安全・安心な県土づ
くりを目指すことを掲げたス
ローガン。

※2 「脳トレ」：2005年に発売さ
れ大ヒットとなったニンテ
ンDS用ソフト「川島隆太教
授監修・脳を鍛える大人のDS
トレーニング」をきっかけに広
まった脳を鍛えるためのトレ
ニングの略称。

※3 「北山五山」：仙台市青葉区の北
山丘陵上にある東昌寺、寛範
寺、光明寺、資福寺、満勝寺から
なる伊達家菩提寺の総称。満勝
寺が北山から移転したため、輪
王寺を加えて北山五山と称す
ることもある。

では、1級合格者を
代表するあの方を
ご紹介しましょう。

1級合格者との
対面が叶ったイタリー!
捜査の行方はいかに……!

和やかに聞き込みに
応じてくださった中澤さん。



1級合格者カードを持つ佐藤さん。
カードのゴールドと笑顔がまぶしい!

ガイドなどをしていますが、「いっきゅう会」としても地域に貢献していこうと計画しています。震災のあとメンバーで南三陸町へ行ったとき、宮城の素晴らしさを伝えるクイズ大会を開催したんです。自分たちの地域が復興していくためにも、かつてどうだったのかを知っておくことが必要だろうし、地域とまったく無関係な復興はありえない。自分たちの地域にこれだけいるんないものがあつたんだと改めて知ってもらうことが大切ですから、復興

のためにも宮城マスター検定の知識を活用したい。そのためにも宮城の魅力発信するものとして何か欲しいなとずっと思っていて、今年は宮城県と連携しながらいくつか企画を進めています。ひとつはバスツアー。まち歩き企画。1級合格者の話を聞きながらまち歩きをして、県内のことを知るきっかけをつくりたい。そして、もう一つは冊子の制作です。地域のことを誇りに思えるように、宮城県にある日本一をテーマにまとめているところです。

宮城マスター検定関係者への聞き込みを終えたイタリー。
夕陽を見つめる彼の心には、不思議な気持ちが湧き上がっていた。

大学進学で私は地元を飛び出し、東京で暮らしていた。しかし、心のどこかで地元が好きだという気持ちがあるにもかかわらず、地元のことを何も知らずに出て来てしまったという後悔と郷愁があり、刑事となってまた宮城へ戻ってきた。そして、地元のことなんでも知りたいという気持ちで、日々地域で起こることを捜査している。

「宮城って何があるの?」他県の人からこんな質問を投げかけられたとき、あなたはなんと返すだろうか。まず松島を思い浮かべる人もいれば、「何も無いよ」と答えてしまう人もいるかもしれない。この質問にたくさん選択肢を用意して回答できる人はどれくらいいるだろうか。実際は、何かあるはずなのに、何も無いと決めつけてはいないだろうか。宮城マスター検定は宮城には「何かある」を気づかせてくれるきっかけになる。

今回出会った宮城マスター検定とそれに関わる方たちのお話。1級合格者は宮城にまつわるあらゆる出来事や歴史に対して、積極的に関心を抱き、なんでも知って

いる方だった。そのうえで、もったくさんの人に宮城の魅力を伝えていこうという熱い志をもっていた。私も、大好きな宮城のためにやらなければいけないことがひとつ増えた。そう、私も宮城マスター検定1級に合格し、地域のことはなんでも知っている宮城マスターになること! 愛する宮城のためにも、地に足着けて頑張っていくぞ! それが私の使命だ!

次回!
刑事イタリー
広瀬川に沈む!

※この企画は連載ではありません。



書いたたりするなら、この資格を取得しておくべきだと思いましたね。

たちと交流できるのはすごいことだと思えますし、私自身もさらに勉強になります。



分が得意な分野について話すので、自分たちがガイドになりつつ学び合うという場になっ

最後に、今後の展望は?
1級合格者の人たちは、様々なエリアでボランティア

「いっきゅう会」ではどこでどんな活動をする? お互いに新しいことを学び合おうという目的で、年に2回研修会をおこなっています。今年の春は秋保に行きました。過去には多賀城や白石、岩出山などに赴き、歴史を学んだり地域のものを食べたりもしました。研修会ではそれぞれ自分が得意な分野について話すので、自分たちがガイドになりつつ学び合うという場になっ

ついに1級合格者のもとへー。
威厳ある風格にひるまず、聞け!聞くんたイタリー!



宮城の知を深め、地域の発展・復興へ貢献!

宮城マスター検定
1級保持者である
佐藤さんの活動について伺った。

――宮城マスター検定を

受けた動機を教えてください。

――では、1級を取得してよかったことは?

まずは県内のいろんな施設を割引額で利用できる合格者の特典があること(笑)。それはそれとして、1級保持者だけが集う「いっきゅう会」で他の合格者と出会うのは刺激的ですね。それぞれに得意分野があつて、自分以外にもものすごく詳しい人がいるんだと驚きました。こういう方

――「いっきゅう会」では

どこでどんな活動をする?

お互いに新しいことを学び合おうという目的で、年に2回研修会をおこなっています。今年の春は秋保に行きました。過去には多賀城や白石、岩出山などに赴き、歴史を学んだり地域のものを食べたりもしました。研修会ではそれぞれ自分が得意な分野について話すので、自分たちがガイドになりつつ学び合うという場になっ

ています。1級を取ったからおしまいではなく、そこからスタートする。自分よりも詳しい分野の人たちから教えてもらい、逆に自分が詳しい分野があれば教えていく。そういつか共に学び合う活動をしてい

宮城マスター検定1級保持者
「いっきゅう会」会長
佐藤 敏悦 さん





仙台花壇団地。団地内の樹木の大きさが団地の歴史を一層感じさせる。
その緑は広瀬川の景観に緩やかにつながっている



川面に映る まちを見た日

語り／板橋友幸

広瀬川はさとう宗幸の
歌に出てくる場所に
過ぎなかった

高校まで仙台で暮らし、大学時代は山形で過ごした。卒業後仙台に戻って就職すると、家と会社の往復になった。日常から逃げるように週末は登山やスキーに打ち込んだ、山形で。金曜の夜に仕事が終わると山形の友達の家泊まって朝から山へ。

終わればまた家と会社を往復する日常が待っている。いつまでたっても仙台になじめなかった。いや、自分からなじんでいかなかった。

音が開こえる瞬間、すうっと抜けていった。
ある日、ペランダに出てみると、川に浮かぶカヤックが見えた。当時はそれが何か分かっていないので、正確に言えば「何だ、あれは」という感じ。あつちからこつちはどう見えているんだろうか。

居ても立つてもいられずカヤック教室に参加した。小さなカヤックにひとり乗り込み、基本的な動作を教わり、その日のうちに初めてのツアー。もちろん、すぐに沈した。そうか、広瀬川ってこんなによかったのか。広瀬川がある仙台も、もしかしたら面白いのかもしれない。

東日本大震災発生。ボランティア活動に参加した。カヤック好きの人たちと出会い、いかにカヤックが面白いという話を聞かされる。平成24年6月、カヤックを購入。すぐに広瀬川を下った。のめり込むうちに、青葉山の間に縫う溪谷のような中流域が街のど真ん中にある、この景観が貴重なものであることが分

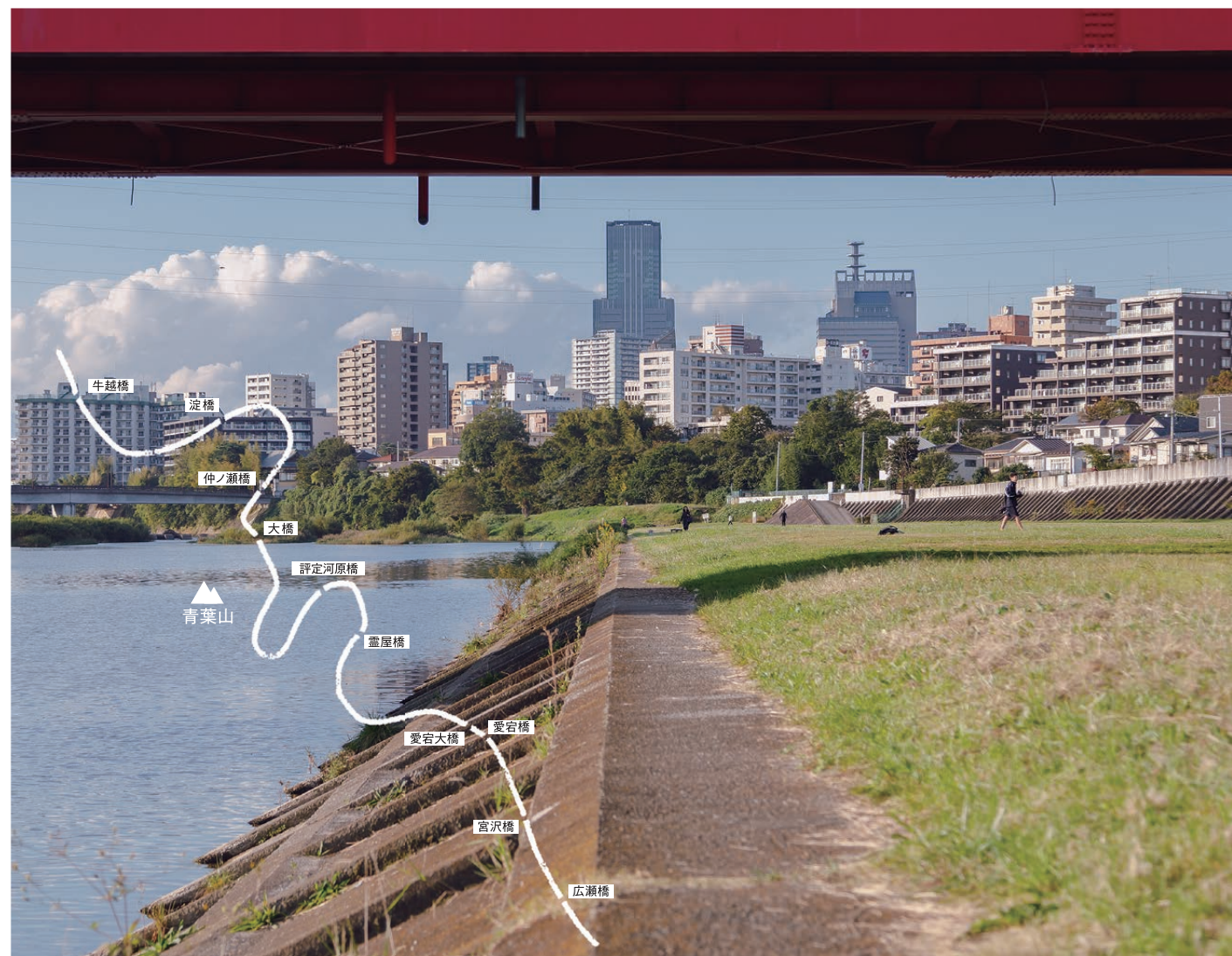
かってくる。周辺の地理や史跡、町の名の由来まで気になり、まるで探検隊のように草をかき分け川の近くを歩いた。あんなに関心のなかった仙台に、急に興味が湧き始めた。水面に反射する光で、まちが輝いて見えた。

妻と河原で夕日を見ながらビールを飲んだ。娘を抱えた妻がペランダに出て手を振った。川から手を振り返した。娘をおんぶして毎朝散歩した。サケが上ってきている、季節の花が咲いている、虫が飛んでいる。それらを見つけては、まだしゃべれもしない娘に声を掛けながら川を歩いた。振り返ってみれば奇跡のような5年間だった。花壇団地は平成30年に取り壊されることが決まっていた。契約切れにより仕方なく引越し、川下りをする回数減った。それでも桜の咲く春、青葉がまぶしい初夏、紅葉が美しい秋、娘を連れて川沿いを散歩し、まだ取り壊されていない花壇団地へ足を運び、柵を越えて土手から広瀬川を眺めている。

身近な資源の価値に
まだ気付いていない人がいる。
その光景の一部となって
さらに豊かにしている人がいる。
川に導かれた人、
川沿いにたたずむ人、川を下る人。
それぞれの目に映る川の先に、
まちの姿が見えてくる。

まちと
わたしと
かわ

Machi to
Watashi to
Kawa



宮沢橋の下から街の中心部を望む

※1...「広瀬川～流れる岸辺～」で始まる。昭和53年のさとう宗幸さんの大ヒット曲「青葉城恋唄」。
このヒットで「杜の都」という雅称や「広瀬川」の名前も全国的に知られるようになった
※2...カヤックに乗ったままの状態、ひっくり返ること

一河一会

川にたたずむ人を訪ねて

インタビュー／菊地正宏

川を見ていると精神的に
落ち着きますよね

芋煮会のグループの
60代男性／大学教授

東北大の研究室で芋煮会に来ていました。私は川の近くのマンションに住んでいるので川は毎日見えています。以前は愛宕橋と宮沢橋の間くらいに中州があって、木がたくさん生えていて、鳥がよく来ていたんです。白鳥やカモが家から見えて、あそこ

辺を根城にしているトンビもいますし。今年はカワウがかなり出沒して、だいがアユを食っちゃったみたい。カワウが来た日はアユが川から跳ねないんですよ。もう食われちゃったのと怖がっているのど。そんなのをずっと見ているのでいろいろなことに気付くね。雨が降った次の日は増水があつて、非常に増水している時なんかは、上流でかなり降ったんだなあと、災害の心配を感じることがありますね。

暇があると
来てしまふんだよね

遊歩道に立って川を見ていた
60代男性／自営業

仕事中にちよつとさぼって川を眺めに来てたんだ。ちよつとい頃、もう少し上流の方、賢淵と松淵という2つの淵があつて、そこ赤旗の間が遊泳地だったの。大学生のお兄ちゃんが断崖絶壁の上で、赤ふんで座ってるわけですよ。で、ハナタレ小僧ともが溺れかけると飛び込んで助け

な鳥が来る季節なんだと。ところがその中州、何年か前に全部削られてしまったんです。増水したとき氾濫する可能性が高いので災害を防ぐために、というようなことが看板に書かれていました。そしたら鳥があんまり来なくなつた。ちよつとそれは残念でした。川を見ていると精神的に落ち着きますよね。こういうきれいな川が街の中に流れているのは素晴らしいことだと思いますね。

川のいいところ？
：まあ、何となくね

土手の階段から
川を眺めていた70代女性 無職

住まいが近いのでたまにこうして散歩に来ています。この近くに3年前にできた災害公営住宅に住んでいて、私の場合は立ち退きでそこに入つて。でも、そんなに環境は変わっていないですね。私、10年前に足を骨折してるんですよ。それで2カ月半入院してお医者さんに「少し歩き

なさい」と言われて、この辺を歩くようになったんです。前は天気がよければ毎日歩いてたんですけど、最近はやっぱり年取つてきたんで歩けなくなりましたね。川のいいところ？：まあ、何となくね。散歩でたまに会つたりする人には「こんなにちは」とあいさつして、取り立てて名前も聞かれませんけど、アユ釣りする人がいたりジョギングする人がいたり、それぞれ好きなことをやっているのがいいんじゃないですかねえ。

にぎやかさが伝わって
くるのはいいねえ

川そばのベンチに座って
友人と話をしていた60代男性 無職

今日は友達とここで待ち合わせ、川を見ながらお話ししていたの。私はこの辺に住んでいるので、時々川の様子を見に来ながらたばこを吸っています。最近吸えるところも少ないですからね。近くだからいい空気を吸ったり、夏場はアユ釣りのおじさんたちがいっぱいいるんで、釣りのあんばいを見たり。川のいいところねえ：まあアユとサケが選上してくるのと、あとはそうだな、この近くの河原で芋煮会やバーベキューをよくやっているんでね。そのにぎやかさが伝わってくるのはいいねえ。それから最近はおート、カヌーっていうのかな？ 下っている若者もいますね。下りながら見る景色も面白いんだろ。ね。あとは飛んでくる鳥がけこう面白い。ウグイスも来ますしツバメも来ますし、もつぱらこの

「川に行かない？」って
誘ったら

川に入って遊んでいた男女グループの
10代女性 学生

今日は大学で演劇部の活動が午前であつて、午後は予定がなくて天気もいいし「川に行かない？」って誘ったら何人か来てくれて一緒に遊んでいました。高校の時は生物部で、絶滅危惧種の魚の個体数を調査して外来種を駆除する保全活動をしていたので、水辺にはよく行っていました。さっきメダカを見つけたけど、あとはカニの死骸だけ…。ここは流れが速いので、牛越橋の方とかの緩やかな浅瀬に行けばもっと生き物が見られるのかなとは思いますが、新潟から仙台に来たばかりで、新潟では近くに川がなかったのでもう川が珍しいのと、広瀬川は本当に大きい。雄大で落ち着きます。包み込む雄大さが：さっきから大きいとしか言っていないですね。都会の中にこういうすてきな場所があるのはいいですよね。



牛越橋付近。土手の階段に座り対岸のにぎやかな芋煮会を眺める女性

青葉山だつてもともと河床だった

橋の下で何かの塊をたいていた
20代男性／学生

ここに竜の口層という地層が出ているんですけど、そこから出る化石の調査、研究をしています。去年まで東北大で学生をしていて、いまは名古屋の大学で修士課程です。角五郎に住んでいたので通学の際に橋からこの場所をチェックしていました。貝の化石が密集している層があり、ここに化石が出ることは分かっていたんですが、研究報告例がなく、じゃあ自分がやるかということ。報告されている中ではクジラが出ますね。500万年前くらいに積もった地層なんですけど、その時はまだこちら辺は海で。いまは川になって、近くの隆起だった海水準が下がったりとかで、われわれのまちに出るわけです。広瀬川は河岸段丘形成で、あそこにも段々になっているのが見え

ると学校にすぐ通報が行っちゃって、何かあったらついでにとなんでしょけど、遊べるところがほとんど小さくなつていくような。学区からも出ちゃ駄目って言われて、学区が狭い公園もないし、あつてもボール遊びができなくて、本当に行くところがなくて。せつかくきれいな川があるのに、親がいる時しか来られないって、もったいないかなあつて思いますね。

投球練習をしています

橋の下で投げ込みをしていた男性
60代男性／運転手

近くに住んでいて、週に2回くらい来て投球練習をしています。16時から仕事なので、それまでの時間、6〜7割くらいの力で2時間くらいは投げてるね。野球は小中高、あとは草野球をやりました。20歳から25歳くらいまで、ピッチャーを少しだけね。経済的な理由とか家の

ますよね。青葉山だつてももとと河床だった場所ですし。そういう意味ではすごく面白いかなと。川との親しみで言えば、対岸で

溪流釣りしている人たちが親しんでいるのかもしれない。むしろ僕らは環境を破壊しているようなもので申し訳ないというか…。面白い生態系もあって、本当にきれいな川なので、人間の工巧で生態系を崩すようなことはあつてはならないと思います。ちょっと説得力がないですけど。

白鳥の夫婦が子どもを連れて

鳥に餌をやっていた男性
60代男性／無職

川にいる鳥に餌をやつてんだわ。カモとか白鳥、サギ、オシドリとかがいるね。慣れてくるとみんな手から食べたり、口笛で呼ぶと集まったりするんですよ。十何年前、白鳥の夫婦が子どもを連れてこの川におつたのを見たのが始まりで、ずーっと餌をやり続けているの。白鳥がいっ

ぱい来ると人も集まってきた、カメランも来るし、園児たちが来ることもあつてにぎわうんだよね。何とかにぎやかにしたいなあと思つて毎日来てやつてたんだけど…。けがをする鳥が増えちゃった。人間のいたずらとか、アユを食べられちゃうからって石を投げて追っ払ったりする連中

もいるし、カワウよけのテグスに引っ掛かることもあるし、捕まえて食べるやつなんかもいるって聞くよ。オシドリなんかもいっぱ

いたんだけど、そういう人がおるから警戒してだんだん来なくなるんですよ。いろんな人がおるからね…。

家族にとつては身近な川

子ども3人を連れて来ていた
40代女性／主婦

子どもを遊ばせに来ました。家にいると子どもたちはユーチューブばかり見ていて、そういう環境がないところに行かないと駄目だと思つて、河原に来て、いるんです。ほかに2人上について、一番上はもう18歳なので、最初に子どもと来たのは10年くらい前ですかね。ボートに乗ったりもしましたし、今度また芋煮会に来ますし、白鳥に餌をやりに来たりもしますし、家族にとつては身近な川ですね。お金もかからないし。ただ、小学生だけで来ちゃ駄目って決まつていて、親と一緒にじゃないと小学生は来られないんです。子どもだけで遊んで



広瀬橋付近。沈む夕日が川を照らす

事情があつて離れて、本気でやらなくなったですね。本気でやつたって食べていけないし、やっぱり仕事をしなければ駄目ですから。プロを目指していたか？ いやいや、子どもの頃は目指していたけど諦めましたね。48〜49歳くらいで健康のためにね、若い頃を思い出して投げ始めたんですけど、それまで20年間くらい投げなかつたですから。スピードガンで測ったりもしてただけど、こ

こに置いて向こうの方を散歩して戻つてみたら、なくなつたんですよ。1万4、5千円くらいの安いやつだけど、誰か持ていったんだね。あとグローブも2回なくなつていたなあ。年を取ってからもスピードを出せるようにしてるんですけどねえ。やっぱり年齢つうのには勝てないもんだね。軟式（の球）で137〜138キロくらいですかね。速い？ いやいや、軟式で138だったらいま

こに置いて向こうの方を散歩して戻つてみたら、なくなつたんですよ。1万4、5千円くらいの安いやつだけど、誰か持ていったんだね。あとグローブも2回なくなつていたなあ。年を取ってからもスピードを出せるようにしてるんですけどねえ。やっぱり年齢つうのには勝てないもんだね。軟式（の球）で137〜138キロくらいですかね。速い？ いやいや、軟式で138だったらいま

川の景色は変わらないねえ

花壇の手入れをしていた
80代男性／無職

この辺に花壇が3カ所あつて、これは南材木町地区連合町内

いっぱいいますよ。もう60だからね。まちの草野球くらいなら少しくらい通用するかもしれないけど、やつてみたいとは思わないねえ。こうして川に来て投げるだけでもいいよ。

会が管理している花壇。あと、八軒中学校の生徒たちが管理しているのと、南材木町小学校が管理する花壇もありますね。生徒たちがここに来て、年に2回植え替えをやるんです。私はね、その後ろにある公園の近くで暮らしていますから。暇つぶしでやっているようなもので、まあ、ボランティアということになるんですかねえ。朝晩散歩する人もいるし、マラソンやっている人もいるのに、草ばうばうの花壇じゃうまくないからね。私は年金暮らしですから、何もしてないと頭がぼけてしまつて、介護のお世話になるから。それよりもこういうふうに、自然の中で仕事をしている方がいいですね。あとは犬ついで、この辺を散歩するとか。ばあさんはもう5年前に亡くなつてね。私の方が早いと思つたらばあさんの方が早かつたなあ。この辺で暮らしてもう五十数年。川の景色は変わらないねえ。



流れる川に 流されて 広瀬川下りを終えて

文／嵯峨倫寛 モデル／イタリーさとう

牛越橋近くの広々とした河川敷。僕と板橋さん、よっくん（イタリーさとう）の3人で、芋煮会を楽しむ大学生を尻目にカヤックを組み立て始めた。空は曇っているが、思いの外暖かい。ああでもないこうでもないと言いながら30分後、今日僕らが命を預ける2艇が完成。広瀬川へとこぎ出した。

最初の難所を過ぎて撮影ポイントに近づくまでは、板橋さんとよっくんがベアとなり、僕がソ

ロでこいだ。浅い川底に悪戦苦闘する僕を尻目に、2人は早速難所へ突入。直後、よっくんは水の壁に吸い込まれびしょぬれになった。僕も2人に遅れて突入し、やっぱりびしょぬれに。そうなるとうう何かが弾けて、瀬を渡る度に「フォー！」などと奇声を発しながらハイテンションで川を下っていた。

空は秋晴れに変わり、高揚した気分とパドルの操作で体が温まる。「二言目には「最高だなあ」

「気持ちいい！」しか出てこない。撮影ポイントに近づき、カヤック操作にも慣れたよっくんがソロでこぎ、僕は撮影に専念するために板橋さんとベアに。よっくんをモデルに撮影を進めていく。川面に反射する光がいい感じだ。ふいに川底をのぞくと、そこにはびっしりと貝殻の化石が表出していた。

先を行くよっくんが、橋脚にカヤックを寄せていったん船から降りた。どうやら、カヤックの中に入り込んだ水を出しているようだ。そして再び乗り込もうとした瞬間、「あつ」という声の後に盛大な水しぶきを上げてカヤックを転覆させ、見事な「沈」を披露してくれた。「何もないところで沈したよ」と板橋さんもち満悦。

船旅もいよいよ佳境へ。なおも浅い川底と格闘しながら川を下り、撮影を進める間に日が傾き、空が少しずつ赤くなっていく。

秋が進み、冬へと近づいていることを感じさせる日の短さだ。そんな感傷に浸っていると、後ろから「やべっ」という声が聞こえ、気付くと僕らの乗るカヤックも「沈」していた。川底に引っ掛かった船底を流れに戻した矢先、バランスを崩したのだ。

「嵯峨さん、カメラー!」「大丈夫です! 確保してます! ヒエー」。見事に首まで水に浸かり、おまけに少しばかり流されたが、板橋さんが用意してくれていた防水バックにカメラを入れていたおかげで事なきを得た。カメラバックをそのままカヤックに積もうとしていたのを思い出し、ぞっとした。想像より温かい川の水に身を浸しながら、「歓迎されているな」と思ったり思わなかったり。

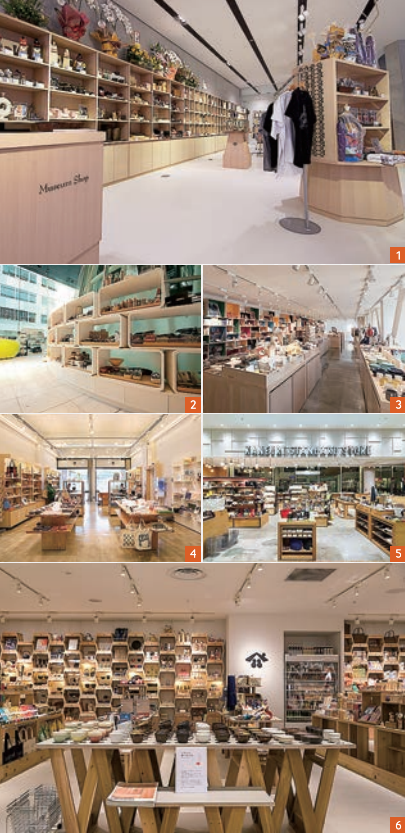
日が暮れかかる頃、2艇は無事目的地にたどり着いた。さすがに少し肌寒いが、下がり始めた気温とは裏腹に、「これはやはり

カヤックを買っしかなかった」と僕の心が熱く語り掛けていた。

川を下っていて、山に登った時と似たようなことを感じた。自分という存在の小ささ、そして、この中で人間は生きてきたのだという、DNAに刻まれた記憶のようなもの。もし今日一人で下っていたらと考えると、怖くなる。そういう「畏怖」が山岳信仰や自然信仰になったのだろうと、実感を伴って想像できる。

広瀬川というのは、その「畏怖」の対象と自分たちの生活との境界があいまいな場所だ。大げさに言えば、死ぬかもしれない状況に身を置きながら、目には見慣れた景色が飛び込んでくる。川に「こぎ出した」からこそ初めて感じたことだった。境界をまたぐことで新しい価値観や感動を得られることを、思い出させてくれる一日だった。

また少し、人生が楽しくなりそうだった。



1 カネイリミュージアムショップ(八戸ポータルミュージアムはっち 1F, 2011～) / 2 カネイリミュージアムショップ6(せんだいメディアテーク 1F, 2012～) / 3 カネイリスタンダードストア(盛岡駅ビル フェザンテラス 1F, 2014～) / 4 TUAD STORE(東北芸術工科大学内, 2016～) / 5 カネイリスタンダードストア(仙台駅ビル エスパル 仙台東館 3F, 2016～) / 6 東北スタンダードマーケット(仙台バルコ 2 5F, 2017～)



KANEIRI ロゴマーク / 2011 年にオープンしたカネイリミュージアムショップのロゴマーク・店内意匠・包装紙等のデザインは日本を代表するデザイナー・北川一成氏によるもの。ロゴマークは、明治・大正時代に魚粕等の卸売を商いとしていた金入の屋号をモチーフにしており、言語に依らず雪国東北の地域性をグローバルに発信できるデザインとなっている。

カネイリ ミュージアムショップ & 東北 STANDARD の挑戦

東北は、日本人なら誰もが知る郷土玩具「こけし」^{★1}発祥の地。ほかに、八戸焼きのような民芸や、こぎん刺しに代表される生活の知恵から生まれた民芸品など、各地で継承されてきた伝統の技術が、いまでも数多く残る場所です。

民俗学的背景を考えると、東北と言えばイタコやオシラサマ、山伏といった民間信仰や、時の政治と関わりながら伝承されてきた鬼剣舞や鹿踊などの芸能が、それぞれの地



かつては、一般家庭の玄関先や居間の戸棚に、地域の伝統工芸品や郷土玩具、民芸品のたぐいが陳列されていたというのが、あたりまえの景色でした。しかし、個人の趣向やライフスタイルの変化に伴い、現代人の住環境から影を潜めて久しいのが、まさにそういった品々ではないでしょうか(下図参照)。

そんななか、東北の風土に根ざした伝統工芸品や民芸品に着目し、つくり手のサポートを兼ねたプロジェクト「東北 STANDARD」が、2012 年に青森県八戸市に本社を置く「株式会社金入」によりスタートしました。永い年月をかけて伝承されたものづくりを「東北のスタンダード」と考えるそのプロジェクトは、今年で7 年目を迎えます。

少子高齢化が目玉の課題であるいま、「株式会社金入」のチャレンジを通して、東北を活かす手立てとしての伝統工芸品や民芸品について考えます。

域で受け継がれていることがあげられます。また、厳しい風土に生きる苦しみや喜びは、民話としても語り継がれてきました^{★2}。そういった信仰と豊かな語りの土壌が色褪せることなく現存しているからこそ、東北の伝統的な工芸品や民芸品もまた多くの人に愛されているのかもしれません。

一方、経済的側面から考えると、高度経済成長期の昭和30 年代から40 年代に、全国的に流行した団体旅行客や観光客向けに、多くの工芸品が販売されました。東北には鳴子をはじめとした全国有数の温泉地があり、工芸品を購入するのは多くの場合、そういった旅先であったと考えられます。

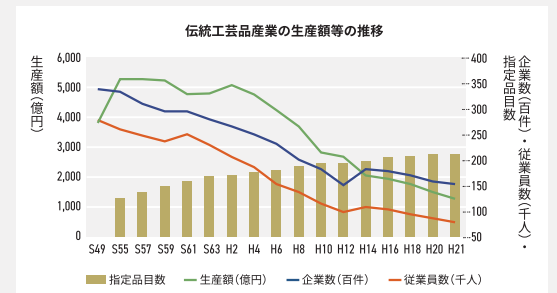
以上のような、文化的背景と経済的変数が複雑に作用するなかで継承されてきた東北の伝

伝統工芸品産業の課題

- ・売上減少による雇用限界
- ・後継者不足
- ・材料や製造用具等の不足

期待される今後の活路

- ・インバウンド効果
- ・オリンピック開催に伴う日本文化への再注目
- ・行政や産地組合のバックアップ



(出典：財伝統的工芸品産業振興協会調べ)

▲日本の伝統工芸品産業の生産額は、昭和55(1980)年をピークに、ほぼ右肩下がりの状態。図では明示されていないが、繊維産業の売上減少が著しいことが影響している。矢野経済研究所「きもの年鑑」によると、呉服の小売金額は昭和56(1981)年には約1.8兆円あったものが、平成25(2013)年には3,010億円と6分の1まで減少しているという。

四季の八幡馬

夏はマリンスタイル、秋は中秋の名月など、南部地方の四季や風土をデザインに落とし込んだ「四季の八幡馬」。八戸市出身のデザイナー田名部敏文さんをはじめ、八戸ゆかりの作家のアイデアを元に株式会社八幡馬の高橋さんが制作。



八幡馬
(青森)

伝統的な八幡馬

良馬の産地だった南部地方に伝わる郷土玩具。福島県の三春駒、宮城県の本ノ下駒と並び日本三駒のひとつに数えられている。木材を丁寧に削り出したふっくらとした身体には華やかな装飾が施され、祝い事の記念品やお土産などとして現在も親しまれている。



別注水色カラー

「弘前こぎん研究所」とのコラボで生まれた、鮮やかなエメラルドグリーンに染め上げたこぎん刺し。天然染料による洗ひ色合いが多いこぎん刺しだが、鮮やかな色合いも相性は◎。



こぎん刺し
(青森)

弘前こぎん研究所オリジナル商品

青森県弘前市を中心に津軽地方に伝わる刺し子技法。綿の栽培が難しかった津軽地方では、藍で染めた麻布の荒い目を白い木綿糸で埋めることで保温性を高め、野良着などに使われてきました。装飾としての評価も高く、現在は小物なども多く作られている。



南部裂織「kofu」

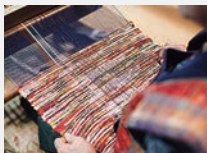
伝統工芸士の井上澄子さんとのコラボで生まれた「kofu」。南部裂織の技法はそのままにステーションリーとしてリデザイン。2013年度にはグッドデザイン賞も受賞し、スタンダードなチェック柄をベースに、バステルなどのカジュアルなパターンも展開しています。



南部裂織
(岩手)

南部裂織工房

木綿糸を経糸に、緯糸には裂いた古布を織りこむ青森県南部地方独特の織物。布を織り込むことで丈夫で温かく、こたつ掛けや仕事着、帯として重宝されてきた。布の柄や色、木綿糸との組み合わせによって、さまざまな表情が生まれるのも古布ならではの魅力。



常盤型染復刻「東北 STANDARD 手ぬぐい」

名取屋染工場とのコラボ手ぬぐい。名取屋の所蔵する常盤型のモチーフはそのままに、型染師・佐々木邦子さんの新型を組み合わせることによって、普遍的かつモダンにアレンジ。デザインは仙台のデザイン事務所NOKOのモロネサトルさんが担当。



常盤紺型染
(宮城)

名取屋染店オリジナル手ぬぐい

江戸時代後期より仙台を中心に発展してきた型染め。十字や菱形などの紺模様をはじめ、花や蝶などの多彩な模様が作られ、常盤型で染めた浴衣は仙台浴衣として、東北各地をはじめ、北海道でも親しまれてきた。現在は名取屋染工場がその伝統を守り続けている。



まだまだあります！ 伝統×クリエイティブの応用編



こぎん刺し柄マスキングテープ

kogin.netとの共同開発。こぎん刺し模様を再現した総刺し柄とこぎん刺しの模様を図鑑のように楽しめる「モドコ図鑑」の2種類。

東北 STANDARD まめぐい

株式会社かまわぬとのコラボで制作。東北6県の文化や工芸品、歴史上の人物などをイラスト化した「まめぐい」のなかにはご当地ならではのオ菓子が。



若者のライフスタイルに合わせたお土産やステーションリーも！

東北から発信するスタンダードという価値軸

事業承継にあたり、「自分の家族や友人が、自分たちの街で楽しく生きていくにはどうしたらいいか」を真剣に考えた結果が、最先端のアートやデザインを扱うミュージアムショップでの工芸品販売だったと語る金入さん。新規性と伝統の両軸で展開することの相乗効果について、〈東北 STANDARD〉オンライン展開とイチオシ商品から考えます。

オンライン版〈東北 STANDARD〉

<http://tohoku-standard.jp/>

CONCEPT

東北には、厳しい環境の中で生まれ、伝わりつづけたもののづくりがあります。工夫や知恵、想いを受け継ぎ、伝統技術を深めながら進化させ、伝えていく人々がいます。東北 STANDARD は、東北のものづくりを軸として、東北に根付いた「暮らし方」を見つめる視点です。私たちが訪れ紹介する先は、現在の東北地方の断片的な風景です。しかし「豊かな暮らし方」の定義が改めて問われる今、その場所に伝わる工夫や知恵は、日本に限らず世界の人々に、新鮮な感覚をもたらす可能性を潜めていると感じます。これから東北の工場や工房を訪ねて紹介します。「伝統工芸」、「美術」、「食」、「建築」、「音楽」をはじめとした、永い年月をかけて伝承されたものづくりの周辺（東北 STANDARD）を記録します。そして対話・映像・書籍・ショップ・展覧会など、様々な媒体を用いて東北から世界に発信し、東北のものづくりの根底に流れる美意識や精神を未来へとつなげていきます。（抜粋）



ウェブサイトには、〈東北 STANDARD〉で取り扱う東北六県の伝統工芸品や民芸品のつくり手インタビューのほか、それぞれと密接する土地の風土を紹介するコンテンツも。2018年11月現在、以下の17の紹介ページと動画が公開されている。カセ鳥（山形）／デコトラ（青森）／鹿踊（岩手）／南部伝承イタコ（青森）／けんか七太（岩手）／曲げわっぱ（秋田）／権細工（秋田）／庄内刺し子（山形）／お鷹ぼっぼ（山形）／常盤紺型染（宮城）／仙台けし（宮城）／秀衡塗（岩手）／南部鉄器（岩手）／大堀組馬焼（福島）／会津張り子（福島）／こぎん刺し（青森）／南部裂織（青森）



去る2月、とうほくあきんどでざいん塾が主催するトークイベント「東北から考える、2020年のその先へ」*1に登壇いただき、示唆に富む数々の話題を提供してくれた『WIRED』日本版の元編集長・若林恵さん。著作刊行*2を記念した来仙にあわせ、〈東北STANDARD〉の金入健雄さんとプランナーの唐津さんとともに再びのトークに登壇いただきました。

「伝統工芸品や民芸品をのこす／まもる／伝える必然とは？」をテーマに進めた今回の結末はいかに!?

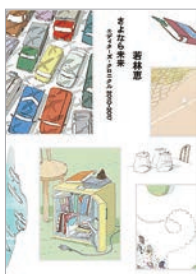


2011年2月、八戸市の市街地に「八戸ポータルミュージアム（愛称：はっち）」*3がオープン。地元で文具店を営んできた経験を生かし、ミュージアムショップの運営をスタートさせた金入さん。青森県内の工芸家を一軒一軒訪ねたり、近隣のデザイナーや写真家の作品を集め、地域に根ざすという施設コンセプトに合致した店舗を運営しています。「日常で使える工芸品を、デザイングッズやアートブックと一緒に並べ販売しています。八戸に外から来る方にお土産を販売する場所ができることで、地元のデザインマインドも上げられると思いますし、お土産品自体の価値も上げられるんじゃないかと考えました」

一方、デジタルテクノロジーを扱う『WIRED』元編集長の若林さんが、大学を卒業して最初に就職

したのが、平凡社の『月刊太陽』以下、太陽』編集部。95年から00年までの在籍期間中、白洲正子*4をはじめ、全国の工芸品や職人を数多く取材したといえます。『太陽』の休刊に伴い編集部を離れたあと、も工芸への関心は続き、骨董市に足を運ぶこともあるのだとか。そんな若林さんが最近モヤモヤと考えていることのひとつが、「世の中のすべてのものが雑貨化していく」ということだといいます。

「00年代に入って唐津や備前の土がネットで買えるようになり、電気窯も安価になってクオリティーが上がり、土地の制約を受けない陶芸家が現れました。かつては、権威や強固なヒエラルキーのもと、価値軸が決定されていたものが、そういうものに規制されない状況がどんどん生まれていく。俺は陶芸家になるんだって言って作っちゃ



*3…八戸ポータルミュージアム（愛称：はっち）
青森県八戸市の地域観光交流施設。市民協働、産業、観光振興のためのクリエイティブ事業などを通して、集まる人々のコミュニケーションがまちを動かす力を生み出すことをミッションとしている。

*4…白洲正子（らす・まさこ 1910-1998）
東京生まれ。幼い頃から能を学び、14歳で女性として初めて能舞台に立つ。1928年、米国への留学から帰国。翌年白洲次郎（1902-1985）と結婚。古典文学、工芸、骨董、自然などについて随筆を執筆。『能面』『かくれ里』『日本のたぐい』『西行』等、著書多数。

*2…若林恵『さよなら未来エディタース・クロニクル2010-2017』（岩波書店、2018年）
テクノロジー、ビジネス、音楽、出版など、世界の最前線に触れてきた気鋭の編集者『WIRED』元編集長による、七年間にわたる思索と発信の軌跡を集成。
<https://sjyonaninai.com/>

*1…採録記事を『とうほくあきんどでざいん2018春』に掲載。

若林 恵 | わかばやし・けい

1971年生まれ。編集者・ライター。ロンドン、ニューヨークで幼少期を過ごす。早稲田大学第一文学部フランス文学科卒業後、平凡社に入社、月刊『太陽』を担当。2000年にフリー編集者として独立し、以後、雑誌、書籍、展覧会の図録などの編集を多数手がける。音楽ジャーナリストとしても活動。2012年に『WIRED』日本版編集長に就任。2017年退任。2018年、黒鳥社（blkswn publishers）設立。

金入健雄 | かねいり・たけお

1980年青森県八戸市生まれ。株式会社金入代表取締役社長、東北STANDARD株式会社代表。せんだいメディアテーク、八戸ポータルミュージアム「はっち」にてカネイリミュージアムショップ等を運営。東北の工芸品や文房具、書籍などのセレクトを通じて東北の魅力を発信し続けている。

唐津宏治 | かつ・こうじ

1978年東京都生まれ。脚本家／プランナー。早稲田大学卒。株式会社スケールを経てDRAWING AND MANUALに参加。徳島県共通コンセプト「VS東京」開発および関連業務、JR仙台駅リニューアルプロジェクト「ヨリ未知 SENDAI」企画・ディレクションなどを行っている。東日本大震災後に立ち上げたプロジェクト〈東北STANDARD〉など、未来の地方のあり方について考察・活動をしている。

えは陶芸家になるんです。すると、「雑貨屋」というものがやたら増えていくことがパレルに起る。西荻窪で雑貨店を営む三品輝起さんの『すべての雑貨』（夏葉社、2017）^{*5}という本には、飛行機や建物まですべてのものが雑貨になる世界を想像してみるとあります。実際、街なかでいい感じの建物なんかを見つけて写真を撮りSNSにアップするというのは、洒落た雑貨を買って写真をアップしたときと完全に等価なんですよね。『WIRED』的に言うところ、あらゆる情報がデジタルプラットフォーム上では、均等で等価なも

のなつてしまふということですが、でも、すべてのものが雑貨化していくというのは、ちょっとホラーですよ」

さまざまな価値判断が消費者

側に委ねられ、価値観の合う同士が繋がっていいというソーシャルな世界に、若林さんは次のように異議を唱えます。「やはり、いいもの悪いものはあると思うんです。ものの価値を発生させるのは誰か。美術批評家で骨董収集鑑定家として活躍した青山二郎^{*}の本を読むと、それにない価値があるかという俺がそう言っているからだ、くらいのこと

しか書いてない。でも彼はすごい目利きなんです。訓練すればするほど、ものの良さは明らかなものとして立ち上がってくる。そういう

な統一の価値軸が世の中から失われていくのは、あんまりいいことじゃないような気がするんです」

某大規模書店をはじめ、雑貨と書籍を組み合わせた書店が全国に増えるいま、金入さんのショッパで棚のセレクトを担当する現場のスタッフも、「なにを扱い伝える店なのか」というのは、デリケートに

気になっている問題だといいます。店舗で扱う工芸品や民芸品について、「僕らがやるべきことは、リデザインみたいなことじゃないと思っています。いかにそのまま届けられるかということに重きを置いています」と話す金入さん。すかさず、若林さんは次のような事例を紹介しました。

◆フィンランドのガラス会社

「ittala」^{*7}では、ティモ・サルパネヴァ^{*8}やタピオ・ウィルカラ^{*9}といったモダンデザインの巨匠に、商品ではなく、定期的にアートピース（作品）を発売している。職人と会話を重ねながら、どう実現するかを時間をかけて検証し、「なるほどこういうことが新しい技術として使えるぞ」となり、その後に商品化されていくという流れがあった。

◆紙間屋「竹尾」^{*10}の周年史をみる

と、グラフィックデザイナーからのオーダーで特殊紙を作ったり、印刷用のインクを開発させたという逸話がたくさん出てくる。クリエイティブな意味でも技術的な意味でもイノベーションの連続で、紙や印刷、製本に対して無理無体な注文を出すというのがクリエイターと呼ばれている人の仕事だったとわかる。

◆友人の現代音楽家によると、19

20年代にイーゴリ・ストラヴィンスキーが『春の祭典』を発表した当時は騒音だと言われたが、60年代になると彼が使った技法がポピュラー音楽で普通に使われるようになる。一般の人たちの耳がそこまで拡張するのに40年くらいかかるんだと。なので、それを最初にやった人は備からないけど誰かが資本を投下しない限り、のちに売れるものがないということが起こり得る。

◆DJ機器メーカーの「Vestax」^{*11}

の社長は、自分が思い描く製品を作れる工場を厳密に選ぶし、本当に技術があるところとしか組まないという方。彼は「俺ら企画屋は、経済的にも技術的にも下請けの工場を育てていくのが義務だ」と言う。同じことはかり依頼していると技術は落ちていくし、「ここまで出来たら次はこれできるよね」というオーダーをし続けることが、企画者のミッションであると。

◆同じことをずっとやっていれば食

えるとか、自分の作ったものを好きと言ってくれる人がこれだけいるくらいいい、というだけでは劣化する。いまはミュージシャンも一人で全部作れるが、一人で作る限界がある。「それ、前にやったこと一緒じゃない？」と指摘してくれる人が必要。自分一人で判断して、さらに自分で自分を成長させていくというのは結構大変なこと。

^{*5}…三品輝起『すべての雑貨』（夏葉社、2017年）
東京の西荻窪にある雑貨店「FALL」の店主によるエッセイ集。21世紀に入り爆発的に増えた雑貨屋、さらには雑貨とはなにかを「一から考えた本」。



^{*6}…青山二郎（あやま・じろう）1901（1979）
東京の資産家の家に生まれ、幼い頃から絵画や映画に興味を持ち、自らも画才を発揮。中学生の頃から焼き物・骨董品蒐集にも興味を持ち、26歳の若さで美術家・横河民輔の蒐集した中国陶磁器2000点の図録作成を委託されるなど、その鑑識眼は天才的と評された。

^{*7}…ittala（イッタラ）
ガラス会社としてスタートし、現代的な北欧デザインによる食器などインテリアデザインを専門とするフィンランドのデザイン企業。

^{*8}…ティモ・サルパネヴァ（1926ー2006）
フィンランドのデザイン業界において世界的な影響力を持つデザイナーであり、彫刻家であり、教育者としても活躍。芸術と実利的デザインが融合された、先駆的なガラス作品を多数手がけ、フィンランドデザインの国際的な評価を高めることに寄与。

^{*9}…タピオ・ウィルカラ（1915ー1985）
フィンランドを代表するデザイナー、彫刻家。1947年、ittala社のデザインコンペに優勝。1951年、ミラノで行われたトリエンナーレで三部門金メダルを受賞し、名声を不動のものとする。

^{*10}…株式会社竹尾

1899年創業の紙の専門商社。色や風合い、豊かな素材感を持つ高級特殊印刷用紙「フラインベーパー」の開発と提供を通じて紙の発展に寄与。国内外の製紙会社と連携して先端技術を取り入れると同時に、多くのトップデザイナーとともにクリエイティブを刺激する素材としての紙を生み出している。

^{*11}…ベスタクス株式会社
1977年に椎野秀聡が創業した日本の音楽機材メーカー・ブランド。国産オリジナルギターメーカーとして評価されたほか、「J」関連の機材などでも有名。音楽市場の縮小、安価な外国製品の台頭、デジタル音源化などの影響を受け2014年に廃業。若林恵の著書『さよなら未来』に、椎野秀聡へのインタビュー記事が掲載されている（pp.313-331）。

「そんなこと」が
わからないから、



潜形シンジ

企画：堀江レイナ（コピー・ロゴ／脚、撮影・デザイン／嵯峨倫寛）



技術の保存を考える際には、革
新させるドライブが必要と話す若
林さん。技術革新の宝庫は一に軍
隊、二に宇宙開発といわれますが、
文化産業も同様であり、さらには
マーケットのニーズに由来しないも
のづくりを、ある種の思考実験と
してもやっていくべきではないかと
提言しました。^{*12}

〈東北STANDARD〉の活動は、
現在進行形で悩みながらやってい
るという金入さん。「職人さんと
話すときはマーケット目線を出さ
ないようにと心がけていますが、
そういうことではない、もつと対
等な関係性というのを我々が作っ

ていかにくちやダメなんだと思
いました。Vespaの方や目利きと
呼ばれた方たちのように、職人さ
んがどういう哲学でものづくりを
しているかを理解しながら、次の
展開を模索していきたいです」と
コメントしました。



^{*12}：『せよなら未来』に収録の「ニーズに死を」
（p.39-40）を参照。

おわりに

〈東北STANDARD〉の店舗に並
ぶ、工芸品や民芸品の仕入れを
担うある若手社員の方は、入社
してからその魅力にはまり、いま
では自家用に買い求めたり、公私
を超えての研究に余念がないそう
です。そのきっかけを尋ねると、
「いまの自分の暮らしと地続きで
あると気づいたから」と。民話が
時代とともに形を変えつつ伝承さ
れてきたように、彼らのような東
北人が、しっかりと伝統の技と物
語を未来に伝えてくれるのかもし
れません。

あなたの〈資源〉を

教えてください。

仙台市域にお住まいの方々に向けてアンケートを実施し、〈資源〉だと思ふものごとについて、その理由とともに自由に答えいただきました。

本

日々の活力。その道のプロが何年もかかって得た知識やノウハウが、数百円出せば知ることが出来るから。

（sonic・38歳・会社員）

自分の中の子ども心

自分にとって、アイデアがひらめいたり、アイデアを生み出そうとする際、起点となるのは、自分や周囲が「面白い」と思えるかどうかということです。その判断基準の真ん中にいるのが、「自分の中の子ども心」です。子どもの心は直感的でシンプルなので、複雑な説明なんかなくても、周囲に「面白い」が伝わると信じています。

自分自身
音楽や電話での気持ちの切り替え、自分の身体や気持ちのスイッチを入れるのも切るのも自分だから。
（スタミ・58歳・介護職）
A4コピー用紙
打ち合わせ時のメモ書き、考えをまとめる時などに使用しています。
（waiz・40歳・会社経営）

自然

それがあって自分という感じ。普段気に留めない（強調していない）けれど、すごく大事なもの。無くては困る。
（左手にマヨネーズ・65歳・会社員）

記憶

地域資源を掘り下げていて、有形だけでなく無形の地域資源も多いことに気づいた。例えばよそ者からみてただの空き地でも、その土地での出来事など、地域の記憶の多い場所。場所は自体のポテンシャルが高く地域資源となりうる。そこは他の土地よりも、コトを起こしやすいからする。そんな経験から記憶は資源だと気づいた。
（いぬ・33歳・フリーランス）

無理、できない。と思わない心

自分で限界を決めるのはもったいない。諦めなければなんとかなるもんです（さっさと諦めた方がよいことも世の中たくさんありますけどね）。
（110・48歳・会社員）

推し

推しが頑張っているとわたしも頑張れるから。

（はなこ・22歳・学生）

パソコン

仕事の必需品であることは勿論、震災の時は通信が途絶えるまで離れた家族、知人へ無事であることをメッセージで残すことができました。
（いぎなりはんばーぐ・31歳・会社員）

仙台駅周辺

仕事、買い物、食事、居酒屋、お祭り、イベント、野球観戦等々：「今日やりたいこと」が仙台駅周辺で1日で済ませることができ、予定が立てやすく、予定を詰め込みがちな私にとって、とても効率の良いエリアだから。
（チャーハン・31歳・会社員）

紙、布、プラスチック、顔料、金属などの素材

こういう物に囲まれて生活しているから。最近知って驚いたのは、現時点では人工的に作り出すことのできないゼラチンの原料が牛や豚などの動物だということ、映画や写真のフィルムに感光膜として塗られる乳剤がゼラチンに感光材料を混ぜて固定させたものだということ。びっくり。
（相原洋・32歳・映像製作）

人と会う時間

美味しいおはぎの店を教えてもらったり、装いに季節の変化を感じたり、表情を見て受け取る言葉の意味が変わったり。会って生まれる出来事や、感情があるなと思います。ささやかなことの積み重ねかもしれないけれど、少しずつ人生が動いているなと感じる時間です。
（きつね村・33歳・デザイナー）

家族

家族が増えるとそれまで自分ひとりの生活では関係のなかった様々なことが急に気になります。
（K介・30歳・公務員）

質問される機会（体験）

質問されるまで、そんな視点・切り口で考えをまとめたことがないので、聞かれて初めて本気で考えることになる。相手にわかりやすく答えようと言語化することで、そのプロセスから気づきを得ることが多い。それが意外と、次の仕事（生産活動）のヒントになったりする。『資源』を生産活動のもととなる物資、と捉えるなら、人から質問される機会は私の場合、確実に生産性に繋がっている。今回のこの「資源とは」のアンケートもそう。この質問をされたおかげで発見があった。
（mimi・41歳・企画／コンサル）

やさしさ

他人に提供できる唯一のものだから。
（ららかん・21歳・学生）

ありがとぅの言葉

自然と活力の湧く魂のご馳走だから。
（nu4602・46歳・フォトグラファー）

スマートフォン

アプリで勉強時間を記録したり、食事を記録したり、自己管理に役立っているから。
（まんまるぼうや・22歳・学生）

森や林

緑や草花、虫、小動物などから、季節を感じることもできる。散歩したり遊んだりしながら、爽やかさや気持ちよさを感じることができる。静かな気持ちで考えたりできる。人との語らいや子どもとの楽しく豊かな遊びとコミュニケーションがとれるところ。空気や水をきれいにする。
（サクラサク・64歳・団体職員）

経験

自分にとって大切な考え、気づき、行動は、過去の経験に基づいて生まれているから。
（漆田・35歳・NPO理事）

お金

今の世の中、どこに行くにも、何をするのにも、何かをはじめのにも、継続するのにも、生きていくにも必要なものだから。
（HS・30歳・営業）

電動自転車
行動範囲を格段に広げてくれる。坂の多い仙台でとても役立ってくれる。車を持っていない自分にとって、足となる存在。少し遠いところに行くにしても電動自転車があるから行ってみようと思わせてくれる。
（竹取の翁・22歳・学生）

コスメデコルテの口紅

保湿力がすごく高いのか、塗っても他の口紅のように唇がガサガサにならなくて心地がよい上に、塗るとよく友達に「あれっ、今日なんかいいね!」と言われる。それによって自分は「いい」寄りにいるぞ…と想着、それで何となく力が湧き、快活に動ける気がしている、ので。
（ミミミ・34歳・編集者）

出身や分野、世代を超えた人と人とのつながり

①自分以外の人は全て異文化であり、異文化との遭遇や交流が新しい文化を創造していく源になると思うから、また②地域の力は人（点）の数とそれをつなぐ線と線の太さの総和だと思うからです。
（ネズミのお宝・48歳・公務員）

ききみみずきは
よいずきん
かぶれば
いろいろ
きこえてくるよ

ききみみずきん スイス編

これはスイスの山

「ききみみずきん」を
かぶったかのように
知ってるような
知らないような声に
耳を澄ませる
コーナー



アトリエでディスプレイに向かうミア。現在は大学院の同級生と一緒に部屋を借り、職場とは別のアトリエとしている。

その二、カン・ミアの生活

このコーナーでは、人生を分かり損ねたままいつの間にかスイスに流れ着き生活を送る筆者が、この偶然ながらも行き合わせた土地で周りの人の考えに耳を敏く（きこえて）てゆきます。

...

さて、今号の「資源」というテーマ。それは各人の生活をあまりに自然に支えているがゆえに、ただの当然として生活の中に無意識に溶け込みがちなのではないだろうか？ また、そういう無意識は異文化に接した時に違和感として改めて認識されやすいものなのではないだろうか？...そう考えて、今回は「資源」を考える材料になるのではないかと、韓国からスイスの大学院へ進学し、すでに一年半の異文化生活を経験しているユーザーエクスペリエンス（UX）デザイナーのカン・ミアさんに話を聞いてみた。

話し手：Kang Mia Seulmi（カン・ミア・スルミ）

1993年ソウル出身。チューリッヒを拠点とするUXデザイナー。韓国芸術総合学校でインタラクションデザインを学んだ後、チューリッヒ芸術大学マスターデザインコース（インタラクションデザイン）へ。テクノロジーと人間が出会うところに興味があり、それらを架け渡すデザインを探る。

文・聞き手と翻訳：斧澤 未知子（おのざわ みちこ）

1984年兵庫県神戸市出身。大阪大学大学院工学研究科を卒業後、せんだいスクール・オブ・デザイン勤務を経て、現在はチューリッヒ芸術大学デザインマスターコースで学ぶ。TADでは過去にフィクショナルな広告とストーリーを組み合わせた「広告とフィクション」を連載。

○ 空気を伝えるデザイン ○

はじめに、UXデザイナーとしてのミアの興味について教えてください。

フォーマット面ではPC画面上の話よりも物理的なプロダクト、トピック面ならテレプレゼンスだね。多くのコミュニケーションがオンラインで起こる時代に、離れた場所にと感情を伝えることができるかに興味があるの。電話するのとチャットするのと、言葉は同じでもその重みは全然違ってくるよね？ どうすれば物理的な存在とは別にある場所に存在することができるとかをいつも考えてる。これは韓国にいた時は彼氏と、今は家族や友達と遠く離れてるのがきっかけかな。他にも、あなたといってもネットで友達とチャットしてたら、私は友達というし、あなたにとって私はそこにいないとも言える。そういう哲学的な部分にも興味があるな。

○ 泳げる都市 ○

チューリッヒの生活はどう？ 特に気に入っていること、ある？

湖で泳ぐこと！ チューリッヒで一番好きなのところかも。水へのアクセスがソウルとチューリッヒの一番の違いだって感じてる。ただ服を脱いで水に飛び込めるって素晴らしいよ。去年の夏は学校に筆ってただけど、ほぼ毎日、近くの川に行っては飛び込んだ。上流からただ浮かんで流れるのを2回くらい繰り返して、ひとりですんで、お腹が空いたら家に帰ってごはんをつくる。それが全然大仰なことじゃないんだよね。あまりに気軽だから、下着代わりにビキニ着てる人も沢山いるよね。

ソウルには漢江（ハンガン）があって、疲れた時に眺めに行ったり、友達と集まってマット広げて、宅配のフライドチキン食べたり韓国焼酎やビールを飲んだりするけど、泳いじゃダメだし危険だしそんなきれ

いでもない。私にとっての川のイメージって、韓国では何というか壮大なもの。巨大でシリアスで圧倒的。一方チューリッヒではサイズも小さくてきれいで気軽な感じ。でもどっちもそれぞれ、漢江は落ち込んでる時に座って眺めることで、チューリッヒ湖は暑い時に飛び込むことで、パワーを回復するのを助けてくれる。

都市と自然のバランスは大事だね。ソウルはすごく都市化してて、公園もあるけどいつもどこかにコンクリートや摩天楼が見えて、自然の中にいるって全然感じなかった。食事、買い物、何でも屋内。一人で座って自前のランチを食べられる空間ってそんなにない。でもそういう空間って落ち着くよね。人と会うのも、そこに芝生あるしって思える。チューリッヒでは5〜10分でそういう場所があるけど、漢江は色々乗り継いでやっと辿り着くって感じ。ソウルはそれをするには大きすぎるのかも。

1. テレプレゼンス：遠隔地にあつてその場に立ち会っているかのような臨場感を持つこと、またそれを提供する技術。一般にはテレビ電話のような映像や音声を使った最先端の技術を示すことが多い。

2. 「...いつも考えてる」：この興味を原動力に、マスターでは現実空間に存在する他者をアバターとして操作するゲーム「HOST」を開発（<http://www.realworldavatars.host>）。また、自分の好きな音を録音して友人など他人に送り、目覚まし音として使える目覚まし時計「Day-tide」（<http://mia-kang.com/daytide.html>）にもこの興味が色濃く反映されている。

3. 湖、近くの川：チューリッヒ湖とリマト川。リマト川のレットン（Flussbad Oberer Letten）は長さ400mにわたる水浴施設として整備され、飛び込み台やビーチバレーコートもある（無料）。

4. 「下着代わりに」：「...こちらに来てハッと認識したが、ビキニというのは水にアクセスするのに便利な「ツール」なのだ！ ちなみにスイスではエアコンも扇風機も一般的ではなく、水こそが夏に体をクールダウンする手段である。

5. 漢江：首都ソウルを横切るように流れる川。川幅は優に500mを超える。流域面積では韓国最大。



リマト川にあるレッテン(注釈*3参照)。夏には人で溢れかえる。

○都市の雰囲気○

一自然以外の面ではどう？

私、買い物大好きだし特別なものを買いたいエゴがあるんだけど、来た当初はミグロとコープ^{*6}だけが買ひ物の選択肢でそれが難しかった。でももっと小さなお店を見つ

けようとはしてて。たとえば新鮮な野菜やジュースが欲しい時にはトルコやイタリア系の、または農家がやっているお店に行くし、セカンドハンドショップですらすごく楽しい。場所を知ると地元みたいな気持ちになれるし、そうするのは外国から来てここで暮らす楽しみかな。私にとって

チュウリツヒは都市というより町って感じ。界限もコミュニティも小さくて、お隣さんや通りで偶然会うようなご近所さんのことも知ってる。居場所がある感じがして暖かくてフレンドリーなのは大好きだな。一方で自分には都市的な習性が根付いてて。ソウルではかなり中

心部に住んでたから、たとえばだジョギングしても、それだけで同時にウィンドウショッピングもしているような状態で。都市の空気が生活の背景だったし、大都市の匿名的な感じが懐かしいこともある。だから時々、街の雰囲気を感に、昼間に人がわーっと増えるバーンホフシュトラッセ^{*7}に行きたくなるのも本当。何も買わず歩くだけで気分が良くなるの。

多様性の違いによる雰囲気の違いもあるよね。チュウリツヒにも多様性はあるんだけど、ソウルと比べると人柄やものの選び方なんかの幅は狭く感じる。服でも、特別なお洒落をしている人ってなかなか見かけない。もちろん人をより知っていくと全部がそうじゃないって分かるんだけど。

○ルーティンのちから○

前に、チュウリツヒは環境が良くて快適だけど、韓国ではいつも動いてたから怠け者みたいない気になるって言ってたよね？

今はマシかな(笑)。こつちに来た頃は、私には学校で寝起きするのも普通だったから、みんなが19時頃に絶対帰るのに驚いてた。一度、グループワークでみんなが18時頃に帰ろうとするから「やること沢山あるよ！残って作業しなきゃー！」って言ったら、「日々のルーティンを守ってエネルギーを残して、明日も効率よく作業できるほうが大切でしょ」って言われたのが衝撃的。その時は全然理解できなかったんだけど、今は完全に分かる。ルーティンを守って作業に集中すれば、いつも効率よく作業できるし、どんなに遅くとも20時には終わって、夜にちゃんとエネルギーも充填できる。効率良くなって時間もあるから料理

や掃除をしていつもきちんとして良い気分で行られる。これを学んだのは大きな財産だな。

じゃあ韓国に帰ることがあったら、それ続ける？

うーん、頑張ってみるだろうけど、実際に維持できるとは思えないな。一人ではどうにもできないところがあるよ。韓国で21時にメールや電話が来ても、「あらごめんささい、でも時間が遅過ぎるから私にはすぐ返信する義務はありませんよ」なんて言えない。ソウルでは全てが速くて新しいことがドンドン起こる^{*8}、すぐ返信しなきゃ怠けた労働者だって思われるだろうな。社会的な圧が違うな。それと比べるとスイスは労働時間、休暇、GDPなんかを見ても、かなりいい国だよ。

その良さが、この人たちの保守的な態度と関係してる気もして、それが退屈だなんて感じることも無くはないけど…分かる！まあ、全て快適で多

くの人が満足してたら変化なんて望まないよね。韓国では、多くの市民が生活に不満を抱えてるし満足してないんだけど、だからこそみんな変えたいと思うし、いつも戦ってる^{*9}。たまに、みんなが何かに到達するため常に努力してる韓国の活動的でエネルギーに満ちた雰囲気が懐かしきものなる。そのほうが良いとかじゃないんだけど、エネルギーが違う。

満足と安心して只々良いことに思えるし、反対の意味で緊張感があるのは悪いように思えるけど、それらはそれぞれ別の状態なんだ、とも考えられるよね。

そうそう、別の状態。でもチュウリツヒの生活が素晴らしくても、やっぱりソウルを懐かしと思うことはあるって示唆的だよ。だってつまり、安全と満足が全てってわけじゃないってことでしょ。



6. ミグロとコープ：スイスの二大スーパーマーケット。それぞれハウスブランドの商品が非常に充実しており、裏返せばそれ以外のものは少ないとも言える。スイスではよく使うスーパーによって人をミグロ/コープチャイルドに分ける冗談があり、私の観測では数ミリの差で高級感を持って受け止められているコープの方だと答える時、人はほんの少しだが誇らしそうな顔を見せる。ミグロではお酒が買えないので注意。

7. バーンホフシュトラッセ：Bahnhofstrasse、チュウリツヒ中央駅南に伸びるチュウリツヒのシャンゼリゼで銀座で御堂筋。有名ブランドが軒を連ねる繁華な通り。

8. 「資本主義やだわ」：ちなみに資本主義の何がやだわなのかというと、持続可能な不安を煽られるところである。スーパーでぎっしりと詰まった商品を見ると、充足に心安らぐ一方、これらは本当に全部買われるのか？買われないものはどこに行くのか？これらが無くなったなら私たちはどうするのだろうか？：そういうことが不安となって大挙し押し寄せて人類存在を疑わせるので嫌だ。不安だ！

9. 「全てが速くて新しいことがドンドン起こるし」：ちなみに「パリパリ(＝早く早く)」というのが韓国

をよく表すキーワードで、「何事も早くあることがソウル市民としての最重要事項のひとつ」だそう。ところでスイスはきちんとしていることで有名で家の何かが壊れてもすぐ修理屋さんが来てくれるよね、と投げかけたところ「韓国ではもっとキレッキレだよ！」とのこと。

10. このときにミアは「友達でも、仕事がなく経済的に不安定な状態に置かれながら小さな一人用のアパートに住んで、自分のためにお金を使うことも貯金することもできない子たちがいる。少なくとも自分とその周辺の世代にとってはそれは真実で、満足してる人なんてめったに見たことない」という話もしてくれて、ああ、まさに韓国について聞いたことのある状況だな：などと薄らぼんやり思っていたら、最近偶然手にした韓国の小説にこのような苦しい状況のことが、しかし美しい文章で興味深く書かれていて、率直に小説としてもとても面白かったので強くお勧めいたします！→ファン・ジョンウン『誰もいない』(斎藤真理子訳、晶文社、2018年)

ききみずきんとは？

日本の昔話に出てくる、かぶると動物や植物の話を書くことができる頭巾。筆者の英語も、そのような別の世界の覗き窓ではないか？

カ
ロ
愛
ワ
ン
ピ
ス

た却防止の帽子

忘れたくないの、あなたから言葉にしない大切なこと。
『月刊漫画方口』から受けた影響を忘れないよう記憶を守る帽子。
アウトブットしたいときは上部のフタを外す。バカッ!

本当は毎日思ってた

あなたの一部になることができれば
どれだけ幸せだろう

どれだけ幸せだろう、って。

作家さんへの敬いから

行々先曲げなニ只下

[illegible]

ガムバク

だって、いつも一緒にいたいから。一緒に人生を歩みたいから。
『月刊漫画ガロ』がピッタリ入るサイズ。いつでもどこでもガロを持ち歩くことができる。
前にかけることで(あえて)みんなにガロを自慢するのがトレンド。
ガロをすぐ取り出せるので利便性もバッチリ。

純愛

クダクダ!!



VOL. 2

長井勝一漫画美術館 編

この包容力! やばいやつじゃん!!

みなさん こんにちは。平成最後の秋さ、全力で恋してますか？
自分を着飾ることだけが愛を伝えられない
恋多き乙女、渾（りゅう）です。

ドキドキ観光案内「純愛アタック!!」は私が服で愛を表現することによって宮城県内の

阿木が智ウズ、1の鬼才をこ紹介する『聖書』

第2回目は思い浮かべるだけでドキッと胸が跳ねてしまう塩竈市「長井勝一漫画美術館」さんに秘めた愛を全力で叫ばせていたきたいと思います。

長井勝一漫画美術館さんは、白土三平先生や、

つけ義春先生、水木しげる先生らを輩出した

伝説的漫画雑誌『月刊漫画ガロ』初代編集長・長井勝一さんへの
尊敬の念をもって作られた場所です。

原画や直筆メッセージなども展示され、
漫画や長井さんのインタビュー記事も読み放題！

これだけ情熱のこもった施設なのに、入場料が無料なの…

なんともたまりません…(目がハート)

新しく作ったお洋服で様子を伺ってばかりの

シャイな私を隠して荒ぶる恋心を纏えば、

いっせよ、色気が増してまた無敵になれる……!

心臓が飛び跳ねて、死んでしまいそう……

だけど、めげちゃダメ……!

それでは、アタックしてまいります!!

○企画・文／柳　○デザイン／スカイスター　○撮影／嵯峨倫寛



あ
あ
あ

ぜんぶ詰め込めには
時間がたりない。

ヒ
ヒ
ヒ

再現デスク……！
胸が熱い……！

この気持ち
長井さんには
届いてるから

原画の魔力って
おそろしいわ。

好き！！
長井勝一漫画美術館さんが……
やっぱり私……

ストーリーを
ビシビシ感じる
直筆ハガキね……

ス
ハ

長井勝一漫画美術館

長井勝一漫画美術館は生涯学習センター・ふれあいエスパ塩竈の館内にあります



長井勝一漫画美術館は、戦後漫画史を語る上で欠かすことのできない『月刊漫画ガロ』の初代編集長で、塩竈市出身である長井勝一氏の功績をたたえるために開設されました。長井氏が発刊した『ガロ』から、白土三平『カムイ伝』、水木しげる『鬼太郎夜話』、つげ義春『ねじ式』、永島慎二『旅人くん』などの名作が次々と生まれ、長井氏は『漫画編集の神様』と称されました。美術館には、長井氏のご厚意により塩竈市に寄贈された『ガロ』をはじめとするたくさんの資料が展示されています。美術館の貴重な原画や関係資料をとおして、漫画文化の一端にふれてみてください。

〒985-0036 宮城県塩竈市東玉川町9-1 TEL.022-367-2010
○開館時間／[平日] 午前10時00分～午後6時00分 [土・日] 午前10時00分～午後5時00分
○閉館日／月曜日・祝日(子どもの日・文化の日は開館) 毎月末日・特別整理期間 ○観覧料／無料
○アクセス／三陸自動車道：利府塩釜ICより5分／JR仙石線：本塩釜駅からバス15分／JR東北本線：塩釜駅から徒歩約1分
○お問い合わせ／塩竈市教育委員会教育部 生涯学習課(生涯学習センター)

ゴリヤ、やべえですよ……。これ以上、私の気持ちをさらわないで……。
学生時代、せっかく上京したのは、私という女は家にばかりこもっていた。
大学近くに〈本のまち・神保町〉があったので、すぐアパートに帰って授業後に購入した本を読んだ。
そんなプチビキこもり生活を営む中で、私は特に漫画にハマった。
気になる漫画は『月刊漫画ガロ』出身の作家さんのものが多かった。
人間が抱える闇も肯定するストーリーや表現が、とても心地よかったのだ。
花輪ローさんの『赤と夜』の表紙に度肝を抜かれ、古本屋で立ち尽し、その晩、足がむくんだ。
丸尾末広さんの世界観が頭から離れなくて、授業中とったノートがちやんと幻想的かつ怪奇な落書きだらけになった。
岡崎京子さんの原画が公開された展覧会最終日にどうしても行きたくて、大学の卒業式をサボった。
社会人になってからは、つげ義春さんの『ねじ式』に衝撃を受け、寝不足で顔がグッソリした。
なにも後悔はしていない。
カ「ロ」系の作家さんに影響を受けまくった私が、必然的にたどり着いたのは長井勝一漫画美術館だ。
足を踏み入ると『月刊漫画ガロ』表紙が敷き詰められた圧巻の壁面。
ドキンッ！
よしっ、さっそく展示をみよう。
ショーケースにうすうす映る自分は、プチ引きこもり生活を好んでいた様子など感じとれないほどの精悍な顔つきだ。
カ「ロ」作家さん直筆のハガキがある……！これは原画だ……！原画……！！
次は長々と並ぶショーケースを覗いてみた。**原画っ……！！！！**
ショーケース下の引き出しに気づく。『ご自由に引き出しを開けてください』とお言葉。
引き出しを開ける手に尊敬の気持ちを最大限込めて、丁寧に、静かな興奮をのせて、開けてみる。
……原画だ……っ！！！！
きっと、ここにある原画には只ならぬ魔力が宿っている。
涙が出そうになっているのだ。全米や女子中高生が泣いた映画で全く泣いたことのない私が。
実際に漫画も読める読書コーナーで、『月刊漫画ガロ』初代編集長・長井勝一さんのインタビュー記事を読みながら、
忠実に再現された長井さんのデスクを時々見た。
長井さんは商業的な漫画雑誌に走ることなく、作家の個性をそのままに漫画作品として世に広めた。
この空間には“漫画しかない”ストイックな作家たちのパワーや執念が溢れ、そこから長井さんへの思慕が滲む。
(いくらカ「ロ」の返品が増えども作家と漫画が面白くなき意味ねえだろ。)
再現されたデスクに目をやると、長井さんの姿がぼんやりと浮かんだ。
どんな著名人でも、好きなことで生活していくことは簡単じゃない。
生活は安定するかわからない。誰も見向きをしないかも。嫌になるかも。誰かに迷惑をかけるかも。
不安と希望の落差が激しくて気分が滅入る。苦しい。
たけど、そんなことは重々承知している。彼らは、それをやらずにいられないのだ。
長井勝一漫画美術館さんがいるからこそ、長井さんや作家たちの築いたものが色褪せず残されている。
それを目の当たりにすると、私の胸は大きく高鳴る。
展示の佇まい、姿勢、全部ひっくりかえって、好きなんです。
ここにいと誰かが囁いている気がする。
(ちっぽけな理想に負けるなよ。)

この連載は第三回まで筆者の佐藤豊が自由に散文を書いていましたが、前号からは東京で出会った東北にゆかりのある人をゲストに呼び、対談を行っています。

民の芸、僕の芸

佐藤豊（Y） 今回お招きしたのは、東京のグラフィックデザイン事務所で助手をされている佐藤謙行さんです。まずは自己紹介をお願いします。

佐藤謙行（N） 一年半ほど前から東京のグラフィックデザイン事務所に務めています。その前は青森県立美術館で働いていました。イベントのチラシ、展示の案内サイン、解説パネル作成などのデザインスタッフとして務める中で、今の事務所とご縁があった。その前は東京でアルバイトをしながら、スケボアの廃材で鳥を作って売っていました（下図）。

Y どうして鳥だったんですか？

N 鳥の置物を自分の部屋の棚に置きたかったんです。

Y 具体的に置きたい場所があるのがおもしろいですね。

N 今思うと、なぜ鳥かというより、もともとはイームズ夫妻の黒い鳥のオブジェ（*1）が欲しかったんですね。あの黒い鳥はイームズのデザインじゃなくて、イームズ夫妻が収集した民芸品のひとつでした。そこで、「民芸」への憧れもあったので、自分なりの「民芸」として鳥を作ってみるか。

長年たしなできたスケボアの廃材から鳥を削り出しました。お金も無いし、あるもので何とかしようと、売れたお金は当時の切実な生活の糧でもありました。仕上げ方法やパッケージ、そして売価、ずっと試行錯誤で。実はこういう切実な状況から生まれるものに「民芸」の魅力が宿るんじゃないかといういやらしい興味もありました。

Y 民芸という話が出ましたが、謙行さんは大学でプロダクトデザインを専攻していたんですよね。

N もともと物を作る仕事でしたくて、弘前工業高校のインテリア科を卒

業したあと、東北工業大学の工業意匠学科で学びました。そのあとは仙台の工業デザイン事務所に五年間務めて、主にホームセンターに売られている生活用品のデザインをしていたのですが、このときからアノニマスデザインに憧れがありました。アノニマスデザインの魅力も、機能的な実直さ、切実な問題解決から生まれる形にありますね。

東北の人？

Y 初対面るとき、謙行さんのことを「東北の人っぽい」とは思わなかったけど、あとから津軽出身だと知って、なんだか腑に落ちるころがありました。言葉で表すのが難しいですが、なんとなくが独特な感じがしました。けれどその「感じ」というのはあくまでも無意識に感じていたことで、「独特さ」が全面に押し出されているわけではないんです。

N 津軽感はあるかもしれませんが。顔も訛ってる（笑）。津軽はくせ者が多いです。私はなるべく目立たないようにこっそり生きたいんですが、結局目立つことが多くて嫌なんです。集合写



スケートボード…ゆくゆくは雪国スケーターの冬の内職として拡まることを夢見ていた。

真で端っこに行こうとしても、両側から人が来て結局と真ん中じゃん………みたいなことがよくあります。それでいて普通じゃつまらないという天邪鬼でもあって、結局ねじれた変な雰囲気も漏れているのかもしれない。あと豊さんがそう感じたのは、東北出身だからというよりも、私と豊さんの考え方や境遇が似ていることもあるかもしれません。

Y それもありますね。お互いグラフィックデザイン事務所のアシスタントという立場で、僕も高校のときにプロダクトデザインを学んでいて、それにもものすごく天邪鬼な性格です（笑）。

津軽弁と標準語

Y 謙行さんは普段、あえて津軽弁で話しているんですか？

N 標準語を喋っていると、演技している感じがあって。

Y 関西出身の友達も同じことを言っていました。

N ほんとの気持ちと一致しない感じがするんですよ。仕事の電話は誤解がないように標準語で話しますが、これは、電話が物理的なスイッチでもあって切り替えやすいんです。でも、こうしてありのままの気持ちを伝え

たいときは津軽弁になります。

Y 言葉の意味だけじゃなくて、声にも意味が付着してるってことですよ。僕はあまりそれを意識したことがないです。実家に帰ったり、弟と電話をしていたりすると自然と訛りが出ますが、普段から意識して訛らずに喋ろうとしているわけでもないんですよ。

N そうなんですよね。音楽で言えば、同じ詩でもメロディが変われば意味が違う、みたいな感じでしょうかね。偏見もあるんでしょうけど、「標準語」って名前がまず嫌なんじゃない。感情まで標準（フラット）になっているような感覚があるのかもしれない。きつと、慣れれば標準語も気持ちと一致してくるんだと思うんですが。実際、仙台に暮らしていた九年間は、目立ちたくないで自称標準語でした（笑）。その頃は気持ちのズレを感じつつも、いじめられないことが大事でも今は訛りを笑われたとしても、ズレなしの気持ちを素のまま伝えることの方が大事と思って、東京でどこまでできるか実験中です。

実存主義と墮落論

N この気持ちのきつかけと思われ

ですね。六年ほど付き合っていた彼女がいたんですが、突然、私の友人とお付き合いするということでお別れました。ファッション、音楽、スケボア、そしてデザイン……私を

かたち作る素材は、その友人への憧れからできています。どちらも失うことはとてもショックでした。でも、何が悪いとかじゃなく、どこからどう考えても結論は「仕方がない」。それがわかって、「あれ？ 自由だ！」と思ったんです。

Y 自由だ！と思えるのはすごい（笑）。いやあ……それまで自分がなかったという恥ずかしい話なんです

が、妙な解放感が確かにあって、そこからだんだん自分らしさというか、今の自分ができることを考えるようになったと思います。

Y そういえば以前、サルトルの実存主義（*2）の話をしてくれましたよね。そのような考えに至ったのも実存主義の影響がありますか？

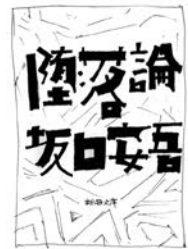
N いえ、実存主義のことは昨年たまたま知って、これ自分じゃん（笑）と思って、興味を持ちました。

Y 実存主義という考え方のわかりやすい例として、ペーバーナイフの例え話が有名です。



*1 チャールズ・イームズ&レイ・イームズ夫妻の仕事は、いわゆるミッドセンチュリーモダン（二〇世紀中盤にデザインされた家具、インテリア、建築物の旗手として広く知られている。「黒い鳥のオブジェ」とは、イームズ夫妻の自宅兼アトリエに置かれていた、二〇世紀前半のアメリカ東部・アパラチア山脈地域で作られていた民芸品のこと。現在は「Fanes House Bed」としてVitra社から商品化されている。

*2 ジャン・ポール・サルトルは一九〇五年生まれ、一九八〇年没。二〇世紀フランスを代表する哲学者、文学者、代表的な著書に『存在と無 現象学的存在論の試み』(L'Être et le néant - Essai d'ontologie phénoménologique)、『嘔吐』(Nausea)など。実存主義は具体的、現実的な個々の人間の在り方を見つめようとする思想で、第二次世界大戦後にフランスでサルトルらによって広まった。サルトルは、物事の本質よりも現実存在を優先、肯定し、また自由に伴う責任を自覚して行動することであることが確立されたとした。



＊3 一九四六年四月『新潮』に発表。「半年のうちに世相は変わった（中略）人間が変わったのではない。人間は元来そういうものであり、変わったのは世相の上皮だけのことだ」とはじまり、「人は正しく堕ちる道を堕ちきることが必要なのだ。そして人の如くに日本も亦堕ちることが必要であらう。堕ちる道を堕ちきることによって、自分自身を発見し、救わなければならない。政治による救いなどは上皮だけの愚にもつかない物である」と結ばれる。敗戦後日本におけるひとつの文学的達成。現在は新潮文庫、角川文庫などで流通。電子図書館「青空文庫」でも読むことができる。

＊4 一九四二年一月現代文学に発表。建築家ブルノ・タウトによる同名の書籍で展開している日本文化論を批判的にとらえ、「僕自身の『日本文化私観』を語ってみようと思うのだ」と、「日本的」ということと「俗悪に就て人間は人間を」「家に就て」「美に就て」の四節から成る。「見たところのスマートだけでは、真に美なる物とはなり得ない。すべては、実質の問題だ」と喝破した。現在は講談社文芸文庫などに収録。こちら「青空文庫」で読むことが可能。



N そうですね、ペーパーナイフを最近あまり見ないので……スプーンで。スプーンは「食べ物を掬うため」という目的があってあの形をしています

が、人間は生まれてこうして形はあるけど「何のため」という目的はないです。生まれてから目的を探していく生き物。目的（本質）の前に実存（存在）があるからという意味で実存主義。宗教によっては、不幸なことがあったときに、神様はなぜ助けてくれなかったんだとか、前世の因果だとか言うけど、でもそうじゃないだろと。これからどうするかなんだと。

Y サルトルが「実存主義とは何か」という講演をしたのが、第二次世界大戦、アウシュビッツの後で（一九五一年一〇月）、それこそ「神」を否定したかったのかなと思います。これは日本で坂口安吾が「墮落論」＊3を書いた時期に重なります。「墮落論」で言っていることは実存主義の考えと根本が一緒だと思うんです。墮落しろというのは文学的な言い方だけど、日本が敗戦するまでのあいだ、日本人はこうだと決めつけられてきたことを一回全部捨てろと言ってるんですよ。でもそれだけでは成り立たない社会もあって、その中でどうしていくかとなると、そ

の時代、その場所ですぐ生きていくかを自分で考えて、自分で選択していくしか方法はないんですよ。

民芸とファミレスのコップ

N 民芸は、当時、工業化が進む社会を危ぶんで、民衆のための民衆による芸（手仕事）を守る運動としてはじまりました。日本各地それぞれの限られた環境から生まれた生活の道具に「健康の美」が宿っていると。特別な美を求めなくても身近なところに美はあるよ、そんな日常の営みを愛でる思想にも惹かれます。でも、その価値を崇めすぎると、民芸は日常のものではなく、特別なものになってしまいう。当時より工業化が進み、さらにAIが普及してくるこれから、手仕事は日常の営みというより、さらに特別な技術として貴重になり、民芸と工芸の違いが曖昧になっていく。道具を大事に使ってほしいけれど、傷つかないように、そつと使う道具は民芸なのかなと。使い良くてガシガシ使ってこそじゃないかと。

Y 民芸は今の時代に本当に必要なものを、現在に可能な技術で作っていいと思います。「民芸は後世に残していくべきもの」という価値観が当

たり前になっていて、現代では道具というよりも商品になっている。後世に伝えていくのはとても大事だと思いますが、それを過剰な消費へと結びつけることにどこか違和感を感じます。謙

行さんが作っていた鳥の置物は現代の廃材を使っていたんですが、平たく言えばそういうことですよ。

N そうですね。例えばこのファミレスのコップ。多くの人に使われるために、金型で量産されて、コンパクトに重ねられて、タフに、安く作られている。これを民芸と言ったら怒られるけれど……私には「健康の美」が宿って見える。豊さんに紹介してもらった坂口安吾の「日本文化私観」＊4でも、最後のほうに同じようなことが書いてありました。お寺のような特別な美よりもドライアイスの工場のほうがグッとくると（笑）。美のために柱を足したりしたわけじゃない、何かしらの切実な原因による結果の形。先日、河井寛次郎展に行ったんですけど、寛次郎さんも同じようなことを言っていました。美は追いかければ捕まらない、気づけばできてるって。

Y デザインも同じです。計算され尽くしてできたものよりも、偶然が重なってできたもののほうがいいと

きもたくさんあります。

N そこに私が知りたいデザインの本質があるような気がします。偶然やアクシデントをごまかさないで、受け入れて工夫していくことにおもしろみがあって、愛おしいなと思います。計算され尽くしたものとか、完璧なものって何か疑ってしまう。そもそも「美」という基準自体が怪しい（笑）。当時から今も同じ手仕事で作られている器があって、その器自体はほとんど変わらないはずが、時代や状況によって美と言われたり言われなかったりする。このファミレスのコップも、百年後には「工業美」とか言われて崇められているかも。つまり、変わるのは人間のほう。美って人間の勝手な基準であって、疑わしいもんです。だからおもしろいですが。信じていた美が変わっていくことにビビっちゃいけないと思うつつ、何を守って何を変えるか、デザインは本当に悩ましくもおもしろい仕事ですよ。（了）

対談のあとで

好きで聴いていたある人の3rdアルバムがあった。ある日、たまたま彼の1stアルバムを初めて聴いて、彼だと気づかなかったほどの印象に驚いた。3rdは、複数の楽器が調和して、安定したきれいな歌声の完成度が高いアルバム。1stは主にギターとボーカルと手拍子。変わらず歌声はきれいだけれど、声の抑揚なのか、音のシンプルさなのか、生々しさなのか……理屈じゃない何か、パッション？言葉で説明しがたい感情的な何かを確かに感じてグッときた。これが民芸が手仕事を基準にする本当の理由かもしれないと思った。ファミレスのコップに宿る「健康の美」とは別の、理屈や合理的なことじゃない、人間特有の感情的な何か。民芸の定義には「手仕事」としか記せなかった、民芸特有の何かが潜んでいそうだ。

対談ゲスト・執筆／佐藤謙行（さとう・のりゆき） 一九八三年青森県黒石市生まれ、東京都在住。仙台のプロダクトデザイン事務所、青森県立美術館デザインスタッフを経て、現在は東京のグラフィックデザイン事務所に勤務。

対談の前、「資源」について話すつもりで何度か打ち合わせをしたが、いざ話してみると民芸の話になった。話しているときは確かにぼんやりとした手応えがあったが、文字になるとおもしろさを失ってしまうように思えた。休みの日に何度か謙行さんの家にお邪魔して話し合いを重ねることにより、僕らが何を言いたかったのか、何を言おうとしていたのかが少しずつ取り戻された。

ただただ考えること。考えたことを言葉にすること、その考えを別の角度から考えてみることで、そしてもう一度言葉にすること。考えることは答えを出すのではなく、流れに身を乗せたり、ときに逆らったり、とにかく考え続けることでしかない。人間のおもしろさは面倒くささそのものだと思う。

執筆・イラスト・デザイン／佐藤 豊（さとう・ゆたか） 一九九〇年福島県相馬市生まれ、東京都在住。仙台のグラフィックデザイン事務所を経て、二〇一四年より有限会社服部一成に勤務。個人での仕事や文筆等も行う。



プロジェクト 完了記念 施設お披露目会

2019
1/6
SUN

Share studio, Photo studio, Exhibition space,
Recording studio, Warehouse, Shop, Cafe

つくる場所をつくる！

DIY PROJECT

施設名称は「スタジオ開墾」に決定！
いよいよ来年1月よりシェアスタジオが稼働！

とうほくあきんどでざいん塾（以下、あきんど塾）では、これまでさまざまな若手クリエイターの支援プロジェクトを展開してまいりましたが、今年度は「つくる場所をつくる！」をキャッチフレーズに、新たな作品や商品を生み出すための〈共同スタジオ〉を創り出すプロジェクト「DIY PROJECT」を実施してまいりました。途中、さまざまな課題が噴出し、当初の予定より約2ヶ月遅れての完成となりましたが、ぜひ多くの方々にこの施設の門出に立ち会っていただきたいと考え、お披露目会を開催する運びとなりました。

当日は、プロジェクトリーダーの関本欣哉氏をはじめ、プロジェクトに参加した若手クリエイターのみなさんとともに、これまでの過程を振り返りながら、今後この場所が仙台のクリエイティブシーンに果たすべき役割や可能性について、語り合えたらと考えています。また、会場では参加クリエイターやアーティストによる作品展示や公開制作も行います。軽食もご用意しておりますので、お誘い合わせのうえ、卸町へぜひ足をお運びください。

日時	2019年1月6日（日）11:00～14:00
会場	スタジオ開墾（旧・イベント倉庫 ハトの家）
参加費	無料（要予約）
対象	プロジェクトの経過や、今後の施設利用等に関心のある方のほか、どなたでもご参加いただけます。当日は暖かい格好でお越しください。
予約方法	あきんど塾のウェブサイトまたはFacebookイベントページよりお申込みください。
主催	とうほくあきんどでざいん塾

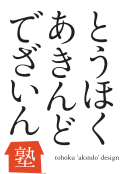
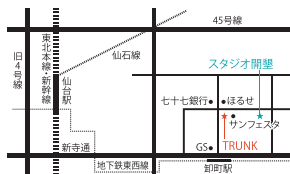
タイムテーブル	11:00～11:15	関係各位より挨拶
	11:15～11:45	プロジェクト参加者紹介
	12:00～14:00	乾杯&立食ランチ
	12:30～13:10	トーク ゲスト：五十嵐太郎（東北大学大学院工学研究科 教授 建築史・建築評論家） 関本欣哉（プロジェクトリーダー、Gallery TURNAROUND 代表）
	13:10～14:00	会場自由見学

スタジオ開墾（旧・イベント倉庫 ハトの家）

〒984-0015 仙台市若林区卸町2-15-6

アクセス情報
・仙台市地下鉄東西線「卸町駅」下車、北1出口より徒歩9分
・お車の場合は、建物隣接のサンフェスタ駐車場をご利用ください

主催
お問い合わせ
とうほくあきんどでざいん塾（担当：山口、深村） | <http://tohokuakindodesign.jp>
〒984-8651 仙台市若林区卸町2-15-2 5F TRUNK内
TEL:022-235-2161（代表） 022-237-7232（直通） FAX:022-284-0864
Email: info@tohokuakindodesign.jp



※「とうほくあきんどでざいん塾」は仙台市と協同組合仙台卸町センターの協働事業です。

The shopping of KENJI KONNO No.5 コンノケンジのお買い物

低価格の商品を消耗するサイクルに飲まれ、モノを手に入れることのステイタスすらかすんで見える昨今。私たちにとっての「お買い物」とはなんなのか？と立ち止まって考えるきっかけになる（かもしれない）、マイペースかつ実直な買い物通、コンノケンジの通販日記。

ゴミ箱 — 役目を終えたモノたちの経由地。

今年のはじめに引越しました。引越という行事は、モノとの別れと出会いのタイミングでもあります。家具や家電を一新する方もいるでしょう。我が家の場合は、ゴミ箱を買い換えました。以前使用していたゴミ箱は、キッチンと冷蔵庫の隙間に入れる必要があり、サイズを最優先に購入しました。そのため愛着を持つことなく、ただゴミを溜めておく箱にすぎませんでした。適当な選択をしてしまえば、適当な使い方をしています。思い出してみると、どこかすさんだ気持ちでゴミを捨てていたかもしれません。というか、ゴミ箱にゴミを捨てる時の気持ちって、大概は前向きな気持ちではないはず。自分の空間を心地よくキープするために不要となったモノを処分する行為ですから。

今回の転居に向けてゴミ箱を新調しようとインターネットという大海原を彷徨い、ドイツのSULOのゴミ箱に辿り着きました。緑色の樹脂製で、背景が赤、文字が白のボックススロゴが正面にプリントされたチャール

ミングなフタ付きのゴミ箱。しかし、見つけた時には既に国内での取り扱いはなく、購入可能なものは120リットルの屋外用の巨大なものでした。ある日仕事の打ち合わせのために訪れたデザイン事務所で目にし



商品：\$166.25 送料：\$134.84
購入先：https://www.amazon.com

記事に、ゴミ箱が紹介されていたことを思い出しました。しかし、当の雑誌も見つからず、メーカーも分からず、覚えていたのは医療用というキーワードでした。医療用もさることながら業務用とかプロ御用達という言

たゴミ箱は、私が欲しかったものでした。実物を見てから一層このゴミ箱が忘れられず、フランス、ドイツに出張した際も現地のホームセンターを訪れたのですが、EROY MERLINZ OOBのいずれでも取り扱いはありませんでした。いつか雑誌で目にした小さな

葉に弱いのです。再びインターネットにダイブし、探し当てました。アメリカのRebeccaのゴミ箱でした。改めて見てみると、医療用とのことなので、真っ白に塗装された質実剛健なそっけないデザインに惹かれました。サイズを選択肢もあり、45リットルが収まる12ガロンに

しました。この時点でアメリカからの送料は、頭から消えていました。日本での取り扱いがなかったため、アメリカのAmazonで購入しました。新しいゴミ箱を実際に使いはじめて、便利な点が特別あるわけではありません。ゴミを溜める以外の機能もありません。愛着があることでゴミを捨てる時の気持ちに変化があったかはさておき、置いてある佇まいが気に入っています。壊れない限り、使い続けられると思います。

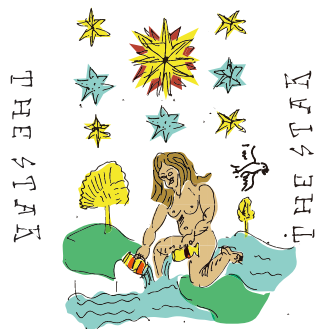
余談ですが、先述のデザイン事務所にはKUMAHARAのBMXもあり、聞く通動で使用しているそうでフレームもパーツもヴィンテージとのことでした。最高、このようにいちいちモノに執心する人は、それだけで信用に値すると思っています。

コンノケンジ

1985年仙台市生まれ。会社員。勤めている会社では、営業部に所属。レコード店でアーティスト名を見ないで（見ても分からないから）何枚か買って、帰宅後改めてラベルを見たら同じアーティストのレコードを何枚か買っていたことが度々あります。



1月生まれ



＜近い未来＞他人のために奉仕することを通して、自分自身の幸せを見つけます。水鏡のように、自分の姿を他人の姿と置き換えて考えてみましょう。

＜キーワード＞年輪。波。小鳥。月の光。17。

＜メッセージ＞何のために何をしたいのか、願望を明確にすることで叶えられるでしょう。

2月生まれ



＜近い未来＞自分の未知の力を発揮できる時期です。難しいと思われていたことも成し遂げることができます。勇気と優しさを持って取り組むことで、反対や対立も克服できるでしょう。

＜キーワード＞テレパシー。富士山。動物。8。

＜メッセージ＞人を励ます行動が自分自身の癒しと喜びにつながります。

3月生まれ

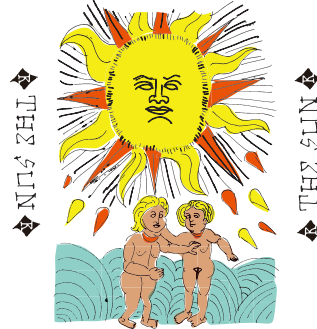


＜近い未来＞自分の才能、天職を見出すでしょう。ゆっくりと焦らず丁寧に、必要なものとスキルを手に入れて時間をかけて取り組みましょう。

＜キーワード＞瞑想。日光。乾杯。水星。14。

＜メッセージ＞心と身体、コミュニケーション、入れるものと出すもの、すべてにおいてバランスが大事です。

4月生まれ



＜近い未来＞これからやってくる問題に向かう心構えと備えをしましょう。越えられなかった壁を越えることができます。あなたは見守られています。

＜キーワード＞進学。子離れ。グレー。石。19。

＜メッセージ＞かわいい子には旅をさせよの精神です。手がけたプロジェクトも外へ羽ばたかせる時期です。

5月生まれ

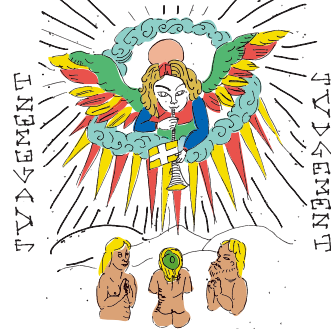


＜近い未来＞あなたが後ろに控えた指揮者となって、表に出ていくリーダーたちを育てて前面に出しましょう。目的のためにはいろいろなやり方を取ることで。

＜キーワード＞整体。香水。雑貨。キャンドル。1。

＜メッセージ＞始まりは思いがけず訪れます。いつでもそのための準備をしておきましょう。

6月生まれ



＜近い未来＞停滞していた悩みが過ぎ去り、転機となるようなメッセージが訪れます。受け入れることでその後の生き方が大きく変わるでしょう。

＜キーワード＞復縁。箱。輪廻。音。20。

＜メッセージ＞人生のコースが変わる可能性があります。無条件の愛を持って、自分の意思で決めましょう。

7月生まれ



＜近い未来＞怠惰な生活習慣から抜け出すチャンスです。後回しにしていたこと、他人まかせにしていたことに率先して取りかかりましょう。

＜キーワード＞果物。パートナー。チェーン。コウモリ。15。

＜メッセージ＞他人の欲望に巻き込まれやすいときです。自分の望むものの、やりたいことを忘れずに。

8月生まれ

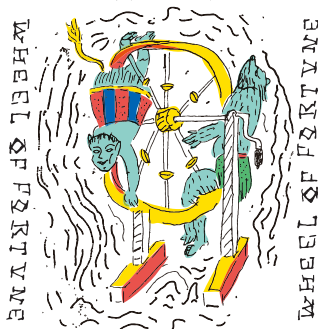


＜近い未来＞行き詰まっていた状況から助け出される機会が訪れます。後先考えず、手放して身を委ねましょう。過去は過去、新しい生活に目を向けましょう。

＜キーワード＞ヘルメット。火花。移転。電気。16。

＜メッセージ＞常に冷静に物事をとらえることです。身に降りかかることには意味があるので。

9月生まれ

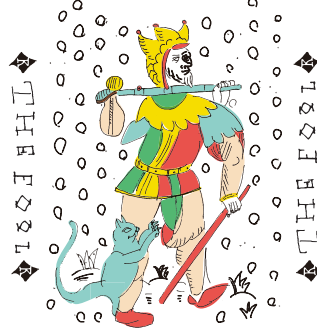


＜近い未来＞順風満帆、仕事も私生活も軌道に乗ります。今後どのような生き方をしていきたいのかをしっかりと勉強しておけば、その通りの道に進めるでしょう。

＜キーワード＞ダイヤル。暗号。約束。偶然。10。

＜メッセージ＞たくさんの人にお世話になります。感謝と礼節の気持ちを持って関わりましょう。

10月生まれ

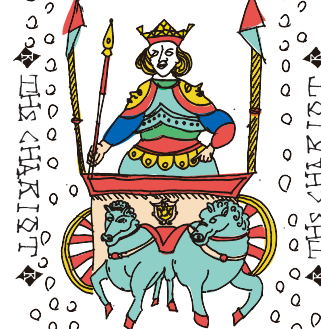


＜近い未来＞道の先まで到達しました。ここから先は未知の世界、時間や固定概念のない世界を見ることになるでしょう。現実に戻してくれる存在を常に忘れずに。

＜キーワード＞太陽。白。円。山。0。

＜メッセージ＞信念、希望、目的を持って行動しましょう。先へ進むのはもっと後でもいいのです。

11月生まれ

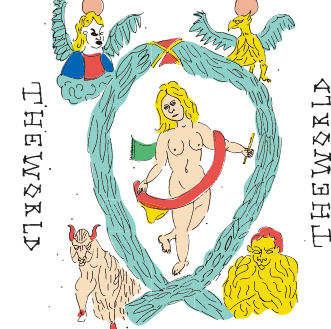


＜近い未来＞進む方向性と今の生活を立ち止まって見直すときです。目指す目的と時期を考え直してみるのも戦略の方法です。

＜キーワード＞テント。故障。制服。馬。7。

＜メッセージ＞無理に進むと葛藤が生じる可能性があります。待つか後退するか、仕事とプライベートのバランスをはかりましょう。

12月生まれ



＜近い未来＞物事がよく見え、世界が広がります。他者へのアドバイスができる環境になり、ひとつの完成を成し遂げることができるでしょう。

＜キーワード＞オリンピック。自然食。温泉。楽器。21。

＜メッセージ＞心と身体の美しさに磨きがかかります。周囲も巻き込んで健康的な生活を促しましょう。



TOHOKU AKINDO DESIGN 2018 AUTUMN & WINTER

TAD vol.5

資源 生きるための知恵とセンス

とうほく あきんど でざいん 2018 秋冬
2018年11月 発行

協働クリエイター／主に公募により集まった仙台ゆかりの19組
編集長／鈴木瑠理子
アートディレクター／根 朋子

編集
とうほくあきんどでざいん塾
〒984-8651
仙台市若林区卸町2-15-2 卸町会館5F TRUNK内
http://tohokuakindodesign.jp/

発行
仙台市経済局地域産業支援課
協同組合仙台卸商センター

本誌は、冊子制作をクリエイターの学びの場とするプロジェクト（若手クリエイターの人材育成事業）の一環として発行しています。2017年8月の創刊から、公募で集まった仙台市域のクリエイターとともに制作を進め、チャレンジを最優先に細部のブラッシュアップを重ねてまいりました。
今年度からは、毎号の応募者の中から編集長とアートディレクターを選出し、協働クリエイターと創意工夫を交えて制作に取り組んでいます。ぜひ読後の感想を事務局までお寄せください。

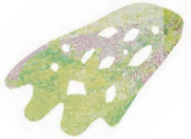
© 2018 Tohoku Akindo Design Juku, Published in Japan All rights reserved.
※ 落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。本書の無断複写・複製（コピーなど）は著作権法上の例外を除き禁じられています。代行業者などの第三者による本書の電子的複製も認められておりません。なお、この本についてのお問い合わせは、下記宛てにお願いいたします。
お問い合わせ先：とうほくあきんどでざいん塾 TEL:022-235-2161

表紙・裏表紙 巻頭言・目次 協働クリエイター略歴・奥付 デザイン／根 朋子
裏表紙 撮形（文字）／嵯峨倫寛

〈資源〉をめぐる言葉

2018年8月から、今号の協働クリエイターの問いがはじまりました。

OPEN



板橋 友幸 いたばし・ともゆき
仙台市生まれ。グラフィックデザイナー。主に紙媒体の広告デザインを手がける。クライアントと一緒に受け取る側の気持ちになって仕事をするのがモットー。2017年よりTRUNKにてフリーランスで活動中。カヤックと登山が趣味。

イタリー さとう
1993年仙台市生まれ。ライター。地元仙台とお笑いが好き。芸名は1度だけお笑いの舞台に立ったときにつけたもの。由来は高校に遡り、部活で「ITALIA」と書かれたジャージを来ている私を見て、先輩が「イタリー!」と呼んでくれたこと。

大友 慎也 おおとも・しんや
1984年生まれ。宮城県東松島市生まれ。グラフィックデザイナー。ブレイン・ワークス株式会社にて、企業の広告・販促物の制作に携わっている。クオリティ・スピード・正確さを兼ね備えたデザイナーになるべく、勉強中。

斧澤 未知子 おのざわ・みちこ
[p.36参照]

黒川 美怜 くろかわ・みさと
1987年福井県生まれ、宮城県名取市育ち。デザイナー・イラストレーター。雑誌を手がけるデザイン会社を経てフリーに。現在はパンフレットやフライヤー、イラストなどを中心に、内容と想いに寄り添ったものづくりを目指す。気になるものは民藝と暮らし。

黒崎 モモ くろさき・もも
仙台市生まれ。栄養学を学ぶ大学生。DIYプロジェクトにも参加している。興味が湧くと、飛び込まずにはいられない性格。いつもワクワクすることを探している。心がけていることは、ご飯をおいしく食べること。

くろさわかな
デザイナー。Webサイト制作、印刷物のデザインなどを手がけている。ざっくりとした内容を形にすることが得意。目指すは見た人が思わずニヤリとしてしまうようなものづくり。好きなものはパンとグラノーラと眼鏡と髭。

根 朋子 こん・ともこ
1984年東京都生まれ、仙台市在住。グラフィックデザイナー。ジャンルを限定せず、デザインやコミュニケーションを交えて生まれる可能性を模索している。モットーは「親に伝わるデザイン」。今号アートディレクター。

協働クリエイター略歴

50音順



コンノ ケンジ
[p.48参照]

混沌 レインボー
2018年結成。文字、文章、イラストなどを駆使するアーティスト・渚と写真家／フォトグラファターの嵯峨倫寛からなるユニット。日常に溢れる「空気」に迎合せず、自らの価値観を原動力に作品を制作している。渚の発想する世界観を嵯峨が写真や映像に写し込む。

嵯峨 倫寛 さが・みちひろ
1980年宮城県石巻市生まれ。写真家／フォトグラファター。広告分野を中心にフリーランスとして活動。「想像の幅」があることに写真の魅力を感じている。被写体からそれ以上のものを伝えることが、自分にとっての写真である。

佐藤 豊 さとう・ゆたか
[p.47参照]

鈴木 瑠理子 すずき・るりこ
1987年仙台市生まれ。編集者、ライター。冊子などの編集を手がける。多様な分野・立場の人々の言葉を聞き、ともに制作テーマを深め、魅力あるものをつくることを目指している。趣味は映画鑑賞と料理。今号編集長。

吉田 勝信 よしだ・かつのぶ
1987年東京都生まれ。デザイナー。「民俗」の延長としてデザインを思考。家業「台所草木染め結工房」（仙台市）のブランディング、日用品の設計など多様な領域でコンセプトメイキングとそのビジュアル化を行う。

渚 りゅう
1992年宮城県角田市生まれ。文字を造形として捉え、墨汁やボールペン、鉛筆などを使って描くことを中心に活動中。最近ではzine制作にも力を入れ、オリジナルの手描き文字や言葉の持つ面白さを表現している。レタリングやイラストレーションなども手がける。

ROSEBUD ろーずばっど
[p.50参照]

制作協力

菊地 正宏 きくち・まさひろ
1975年岩手県大船渡市生まれ。編集者／ライター／漁業ジャーナリスト。仙台経済新聞編集長、SimpleText代表、logue経理部長。サシ飲み教祖、徒歩部部長、ファミコンナイト主宰、きき酒師。
[pp.16-23]

合同会社 スカイスター
伊藤 典博 いとう・のりひろ
安保 満香 あんぼ・みちか
広告／ロゴ／イラストレーション／パッケージ／インクルーシブデザインなどの制作に取り組んでいる。“きらめきとひらめきを”をテーマに、デザインを通してキラリと輝く瞬間をお手伝いしたいと考えている。
[pp.40-43]

高橋 光子 たかはし・みつこ
仙台市生まれ（宮城→秋田→岩手→宮城→東京→宮城）。仕事と人生は一蓮托生。人と出会い、語り合い、旅することが幸せ。自分にできそうなことは何でもトライ。モットーは「わかりやすく」。主な仕事はディレクター、編集、ライター。
[pp.6-9]

とうほくあきんどでざいん塾

コーディネーター
長内 綾子 おさない・あやこ
1976年北海道生まれ。Survivart主宰。2011年11月、震災を機に仙台へ移住。現代美術とビジネスの両方の現場で、問いを立て応答を引き出す場の設計、およびキュレーションを行っている。

コーディネーター
松井 健太郎 まつい・けんたろう
1980年福島県生まれ。グラフィックデザイン事務所BLMU代表。エディトリアルデザイナー。建築・プロダクト・グラフィックなど分野にとらわれない'ものづくり'を中心に、地域とクリエイターを結び活動も展開中。

アシスタント
深村 千夏 ふかむら・ちか
1984年宮城県石巻市生まれ。大手エステサロン勤務、さまざまなボランティア活動への参加を経て現職。コーディネーターをサポートしつつ、TRUNKの受付業務を担う。“週末セラピスト”としてエステ技術も提供している。

〈資源〉をめぐる言葉

〈資源〉というテーマをより深く理解しようと、協働クリエイターの面々が
メーリングリストを通して交わした対話の一部をご紹介します。

☑ 18/09/06 00:46

「資源」の説明の中の「生きるための知恵」は、感覚として大事に持っていたいもの、思い・考え・思想のような形のないものを考えていました。一方で、たとえば水、電気、ごみ処理やリサイクルといったいわゆる「資源」と聞いて思いつくが事柄から十分「生きるための知恵」（知識、情報？）は見出せるのかもしれないなあとも思います。（[R](#)）

☑ 18/09/06 12:18

知り合いの旦那さんがカナダ人なのですが、

その方は広瀬川で遊ぶのが大大好きなようで、休日になるとフラ～と一人で浮き輪を持っで泳ぎにいくそうです（上流の綺麗な水辺でなく、普通に街中の広瀬川へ）。奥さんのには「いい大人が裸に近い格好で恥ずかしい…」と少し呆れているそうですが、外国の方のほうが川遊びは身近なのかなと思ったのです。（[M](#)）

☑ 18/09/06 18:32

外国で夏に、平日でも水着で湖・川でくつろいでる沢山の人を見ると「この湖や川って

この人たちの資源だな」と思います。「財産」でも近いかもしれません。これを資源だと思ったと、街が持っている何かそこに住む人たちに資するものとして存在しているというか、その存在が、住む人たちの好きだとかお気に入りだと思える過ごし方を生活の一部とすることを可能にさせている、ということかなと思います。湖がなければどこかに出かけていかなくちや得られないものが、湖の存在で、生活の中、時間ができた屋下

中、時間ができた屋下

がりに水辺に行つてのんびりすることを可能にし、それが生活の中での自然なこととして、雨が降ったら傘をさす、みたいな選択肢としてそこにある。こうして得られるものって、まあ、豊かですね。同じ水辺でも、例えば京都の鴨川なんかは、ピクニックや夕暮れの黄昏、逢引、大学生のレジャーと鬱屈（四畳半話体系の）一つの話にあった対岸で楽しむサークルの人たちに、夜間に紛れて火花を打ち込む、というの、私の友達の京大生は実際にやったこと

生は実際にやったこと

があるそうです。屈折してますね）など、違った形の寄る辺になっていたりもする。

こういう存在って、特別な（というのは素晴らしいとかの意味ではなく、特異点というよう

な、たとえばプールとか遊園地とか、あるいは瞑想道場かもしれないけど、ある意味では施設的な）何かを、自分たちはこの街に持つてるし使えるっていう感じかなと思いました。また、それは使うも使われないも人次第で、ゴロンと存在しているものをそういう利用可能なものにするのは人の行動、というか。ものが持っている性質の大小（広瀬川は浅いから…とか）ではなくて、人の気持ちと使い方が捉え方を変える、というのは

頭の中にメモしとこー！と思いました。（[M](#)）

☑ 18/09/06 18:44

獅子踊りを研究しておられる舞踊家の方に、仙台市泉区松森が発祥の獅子踊りは、生活の全てが集落の中で完結していた時代に、その中だけでは解決できないことへの助けを人ではない何かに求めようと、不安で不安で体を動かさずにいられなくて生まれたものなのではないか、とお聞きしました。また、はじめは獅子踊りを復活させるつもりだったけれど、フィードバックをするうち、昔とは違って住むところと働くところが分離した「今」の不安から生まれるもの、生まれざるを得ないものは、踊りの形とは限らないな、

となり、今もその形を探っているところだそうです。（[M](#)）

☑ 18/09/07 13:25

川に関する話を読んでいて、私は川を資源として使っていないし、そう捉えていないなあ

場所がたくさんあるし、と。なので、芋煮会のように、カヤックで遊んでいる人、川で泳いでいる人をそこそこ見かけようになつたら、「あ、いいんだ」と思っで自分もやりだすかもしれない。（[K](#)）

☑ 18/09/18 13:15

「資源」というと、環境の方に頭がいつてしまっていたのですが、「生活やその人を形作っているもの」をもっとよく見てほしいということのかなと理解しました。「川」という資源が「洗濯機」や「プール」や「イオン」に代わつても、「川」がなくなつたわけではない。けれど、資源としてそこにあるということを認識できなければ、それは「進化」と同時に「退化」

というブレーキがあります。じゃあそれなりの機関に聞けばいいかも

できないけれど、それは「進化」と同時に「退化」

したことになる、ということでしょうか。

最近ブラゴミ問題で

ストローが槍玉に挙げられていますが、それに関して笹でストローを作った新潟の喫茶店の記事を読みました。幼い頃遊んだシャボン玉で笹の茎をくりぬいてストロー代わりにした客の体験が大きなヒントになったそうなのですが、これが今回のテーマの「資源」かな、と感じています。

その上で、そういった「資源」がなぜ大事なのかは、「アイデンティティを形成するものだから」なのかな？と。（[K](#)）

☑ 18/09/18 17:08

ゴロンと転がっているもの、という印象は私もそうでした。そこ

にある（ある程度）変わらないモノで、そこから人それぞれの「生きるための知恵、アイデア、センス」にゆるく繋がっていくようなイメージです。（[T](#)）

☑ 18/09/18 17:56

「資源」というテーマで注目したいのは「生活やその人を形作っているもの」に近いと思います。「資源」を「生きるための知恵やアイデア、センス」と表現しています。

言うんですが、もっとも言うんですが、現在の

まのありよう自体がそもそも自分事なのだと気づきつつかきみいたのままプラスチックゴミが増え続けたら」と自分事として思うきっかけがあつたとしたら、むしろそれが「資源」なのかなと思います。そして「資源」を掲

きつかけは、例えばまちの中のどこかを魅力と捉えるのかとか、日常で感じる興味や違和感の根を掘り下げた先に出てくる思いに触れることだったりするのではないかと思っています。

きつかけは、例えばまちの中のどこかを魅力と捉えるのかとか、日常で感じる興味や違和感の根を掘り下げた先に出てくる思いに触れることだったりするのではないかと思っています。なので、この冊子の企画すべてがやっぱり「資源」になりうるし、この冊子自体も「資源」になりうるのだと思っています。もちろん、まちのありようは環境も含むので、必然的に「資源」にも当てはまります。たとえば笹のストローを発売した方にとって「このままプラスチックゴミが増え続けたら」と自分事として思うきっかけがあつたとしたら、むしろそれが「資源」なのかなと思います。

ける中で、現在ある問題や違和感を解決したり、物事を活用する具体的な方法を探るというよりは、事柄を通して「暮らしの中の自分の立ち位置を知る」ための視点を提示したいのだと思います。また、問題や違和感の先を批判したいわけではなく（それらが必ずしも必要なものとは限らないし、それらを知らぬ間に享受することが当たり前になって暮らしが成り立っている側面もあるので、それらを通して「何が見えるか？」という部分を自分なりに考え、表出させるのが目標地点だと思います。そういうことを、読者の方にも「こういうことかな？」と感じていただけるようにしたいです。（[R](#)）